

高野聖

泉鏡花



「参謀本部編纂の地図をまた繰開いて見るでもなからう、と思つたけれども、余りの道じゃから、手を触るさえ暑くるしい、旅の法衣の袖をかかげて、表紙を附けた折本になつてのを引張り出した。」

飛驒から信州へ越える深山の間道で、ちようど立休らおうという一本の樹立も無い、右も左も山ばかりじゃ、手を伸ばすと達きそうな峰があると、その峰へ峰が乗り、巔が被さつて、飛ぶ鳥も見えず、雲の形も見えぬ。

道と空との間にただ一人我ばかり、およそ正午と覚しい極熱の太陽の色も白いほどに冴え返つた光線を、深々と戴いた一重の檜笠に凌いで、こう図面を見た。」

旅僧たびそうはそういつて、握拳にぎりこぶしを両方枕まくらに乗せ、それで額ぬかを支えながら俯向うつむいた。

道連みちづれになつた上人しようにんは、名古屋からこの越前敦賀えちぜんつるがの旅籠屋はたごやに来て、今しがた枕まくらに就いた時まで、私わたしが知つてる限り余り仰向あおむけになつたことのない、つまり傲然ごうぜんとして物を見ない質たちの人物たぐひである。

一体東海道掛川かけがわの宿しゆくから同じ汽車くるまに乗り組んだと覺えている、腰掛こしかけの隅すみに頭こゝろを垂たれて、死灰しかいのごとく控ひかえたから別段目べつだんめにも留とどまらなかつた。

尾張おわりの停車場ステイションで他の乗組員ほかは言合いいあはせたように、残のこらず下りたので、函はこの中なかにはただ上人じゆんと私わたしと二人ふたりになつた。

この汽車くるまは新橋しんばしを昨夜九時半こゝろに発たつて、今夕敦賀こんせきに入いらうという、名古屋なごやでは正午ひるだつたから、飯いに一折いちせつの鮓すしを買かつた。旅

僧も私と同じくその鮓を求めたのであるが、蓋ふたを開けると、ばらばらと海苔のりが懸かかつた、五目飯ちちらしの下等なので。

（やあ、人参にんじんと干瓢かんびようばかりだ。）と粗忽そそツかしく絶叫ぜつきようした。私の顔を見て旅僧は耐え兼ねたものと見える、くつくつと笑い出した、もとより二人ばかりなり、知己ちかづきにはそれからなつたのだが、聞けばこれから越前へ行つて、派ちがは違ちがうが永平寺えいへいじに訪ねるものがある、但しただ敦賀たかに一泊ぱくとのこと。

若狭わかさへ帰省する私もおなじ処ところで泊らねばならないのであるから、そこで同行の約束やくそくが出来た。

かれは高野山こうやさんに籍せきを置くものだといつた、年配四十五六、柔和にゅうわかなんらの奇きも見えぬ、懐なつかしい、おとなしやかな風采とりなりで、羅紗らしやの角袖かくそでの外套がいとうを着て、白かくそでのふらんねるの襟卷えりまきをしめ、土耳其形トルコがたの帽ぼうを冠かぶり、毛糸てぶくろの手袋てぶくろを嵌はめ、白足袋しろたびに日和下駄ひよりげたで、一見そうりよ、僧侶

よりは世の中の宗匠そうしやうというものに、それよりもむしろ俗か。

（お泊りはどちらじゃな、）といって聞かれたから、私は一人旅の旅宿のつまらなさを、しみじみ歎息たんそくした、第一盆ぼんを持って女中が坐睡いねむりをする、番頭が空世辞そらせじをいう、廊下ろうかを歩行あるくとじろじろ目をつける、何より最も耐え難いのは晩飯の支度したくが済むと、たちまち灯あかりを行燈あんどんに換かえて、薄暗うすぐらい処でお休みなさいと命令されるが、私は夜が更ふけるまで寐ねることが出来ないから、その間の心持といつたらない、殊ことにこの頃は夜は長し、東京を出る時から一晩の泊とまりが気になつてならないくらい、差支さしつかえがなくなれば御僧おんそうとご一所いっしょに。

快く領うなずいて、北陸地方を行脚あんぎやの節はいつでも杖つえを休める香取屋かとりやというのがある、旧もとは一軒けんの旅店りよてんであつたが、一人女ひとりむすめの評判かたりやなのがなくなつてからは看板かんばんを外はずした、けれども昔むかしから懇意こんいな者

は断らず泊めて、老人夫婦が内端に世話をしてくれる、宜しく  
ばそれへ、その代かわりといいかけて、折を下に置いて、

(ご馳走は人参と干瓢ばかりじゃ。)

とからからと笑った、慎み深つつしそうな打見うちみよりは気の軽い。

## 二

岐阜ではまだ蒼空が見えたけれども、後は名にし負う北国空、  
米原、長浜は薄曇、幽に日が射して、寒さが身に染みると思っ  
たが、柳ヶ瀬では雨、汽車の窓が暗くなるに従うて、白いもの  
がちらちら交まじつて来た。

(雪ですよ。)

(さようじやな。) といったばかりで別に気に留めず、仰いで空

を見ようともしない、この時に限らず、賤ヶ岳しず たけが、といつて、古戦場を指した時も、琵琶湖びわこの風景を語った時も、旅僧はただ頷いたばかりである。

敦賀で悚毛おぞけの立つほど煩わしいのは宿引やどひきの悪弊あくへいで、その日も期したるごとく、汽車を下ると停車場おりのの出口から町端まちはなへかけて招きの提灯ちようちん、印傘しるしがさの堤を築き、潜抜くぐりぬける隙すきもあらず旅人を取囲んで、手て手で手に喧かまびすしく己おのが家号やごうを呼立てる、中にも烈はげしいのは、素早すばやく手荷物ひつたくを引手繰ひつたくつて、へい難有ありがとう様さまで、を喰くらわす、頭痛持こらは血が上るほど耐え切れないのが、例の下を向いて悠悠ゆうゆうと小取廻ことりまわしに通抜とおりぬける旅僧は、誰も袖たれを曳ひかなかつたから、幸いその後その後に跟ついて町へ入つて、ほつという息を吐ついた。

雪は小止おやみなく、今は雨も交らず乾いた軽いのがさらさらと面おもてを打ち、宵よいながら門かどを鎖とぎした敦賀とおりの通はひつそりして一条二条



縦横に、辻の角は広々と、白く積つた中を、道の程八町ばかり  
 で、とある軒下に辿り着いたのが名指の香取屋。

床にも座敷にも飾りといつては無いが、柱立の見事な、畳の  
 堅い、炉の大きいなる、自在鍵の鯉は鱗が黄金造であるかと思わ  
 るる艶を持った、素ばらしい籠を二ツ並べて一斗飯は焚けそう  
 な目覚しい釜の懸つた古家で。

亭主は法然天窓、木綿の筒袖の中へ両手の先を竦まして、火鉢  
 の前でも手を出さぬ、ぬうとした親仁、女房の方は愛嬌のある、  
 ちよつと世辞のいい婆さん、件の人参と干瓢の話の旅僧が打出  
 すと、にこにこ笑いながら、縮緬雑魚と、鰈の干物と、とろろ  
 昆布の味噌汁とで膳を出した、物の言振取成なんど、いかにも、  
 上人とは別懇の間と見えて、連の私の居心のいいと云つたらな  
 い。

やがて二階に寢床ねどこを拵こしらえてくれた、天井てんじょうは低いうつぱりが、梁はりは丸太まわらしたで二抱ふたかかえもあるう、屋むねの棟ななめから斜わたに渡わたつて座敷はての果ひざしの廂ひざしの処はではあたま天窓つかに支つかえそうになつてゐる、巖がんじょう乗やぶくりな屋造やぶくり、これなら裏うらの山かから雪崩なだれが来きてもびくともせぬ。

特に炬燵こたつが出来こたつていたから私はそのまま嬉うれしく入いつた。寢床ねどこはもう一組おなじ炬燵こたつに敷しいてあつたが、旅僧りょそうはこれには来きたらず、横よこに枕まくらを並ならべて、火ひの氣きのない臥床ねどこに寝ねた。

寝ねる時とき、上人じゆんじんは帯おびを解とかぬ、もちろん衣服いふくも脱ぬがぬ、着きたままるま円まるくなつて俯向形うつむきなりに腰こしからすつぽりと入いつて、肩かたに夜具やぐの袖そでを掛かけると手てを突ついて畏かしこまつた、その様子ようすは我々われらと反対はんたいで、顔かほに枕まくらをするのである。

ほどなく寂然ひっそりとして寐ねに就つきそうだから、汽車きしやの中なかでもくれぐれいっただのはここのこと、私は夜よが更さらけるまで寐ねることが出で

来ない、あわれと思つてもうしばらくつきあつて、そして諸国を行脚なすつた内のおもしろい談はなしをといつて打解うちとけて幼おさならしくねだつた。

すると上人は頷わしいて、私は中年から仰向けに枕に就かぬのが癖くせで、寝るにもこのままではあるけれども目はまだなかなか冴さえてゐる、急に寐就しかれないのはお前様とおんなじであろう。出家しゅつげのいうことでも、教おしえだの、戒いましめだの、説法とばかりは限らぬ、若い、聞かつしやい、と言つて語り出した。後で聞くと宗門しゅうもん名譽めいよの説教師で、六明寺りくみんじの宗朝しゅうちようという大和尚だいおしょうであつたそうなの。

## 三

「今にもう一人ここへ来て寝るそうじやが、お前様と同国じや

の、若狭の者で塗物の旅商人。ぬりもの たびあきんど いやこの男なぞは若いが感心に  
実体じつていな好い男。よ

私が今話の序開じよびらきをしたその飛驒やまごえの山越をやった時の、麓ふもとの茶  
屋いっしょで一緒になった富山とやまの売薬やくという奴やつあ、けたいの悪い、ねじ  
ねじした厭いやな壮俊わかいもので。

まずこれから峠とうげに掛ろうという日の、朝早く、もつとも先せんの  
泊とまりはものの三時ぐらいには発たつて来たので、涼しい内に六里ば  
かり、その茶屋までのしたのじやが朝晴でじりじり暑いわ。

慾張よくばり抜いて大急ぎで歩いたから咽のどが渴かわいてしようがあるまい、  
早速茶を飲もうと思うたが、まだ湯が沸わいておらぬという。

どうしてその時分じやからというて、めったに人通ひととおのない山  
道、朝顔あさぎの咲さいてる内に煙が立つ道理もなし。

床几しょうぎの前には冷たそうな小流こながれがあつたから手桶ておけの水を汲くもう

としてちよいと気がついた。

それというのが、時節柄暑さのため、恐おそろしい悪い病が流行はやつて、先に通つた辻などという村は、から一面に石灰いしほいだらけじやあるまいか。

(もし、姉ねえさん。)といつて茶店の女に、

(この水はこりや井戸いどのでござりますか。)と、きまりも悪し、もじもじ聞くと。

(いんね、川のでございます。)という、はて面妖めんようなと思つた。

(山したの方には大分流行病はやりやまいがございますが、この水は何なにから、辻の方から流れて来るのではありませんか。)

(そうでねえ。)と女は何気なにげなく答えた、まず嬉うれしやと思つと、お聞きなさいよ。

ここに居て、さつきから休んでござつたのが、右の売薬じや。

このまた万金丹まんきんたんの下廻したまわりと来た日には、ご存じせんすじの通り、千筋ひとえの単衣ひとえに小倉こくらの帯、当節はさは時計はさを挟はさんでいます、脚絆きやはん、股引ももひき、これはもちろん、草鞋わらじがけ、千草木綿ちぐさもめんの風呂敷包ふろしきづつみの角かどばったのを首くびに結ゆわえて、桐油合羽とうゆがつぱを小さく畳たたんでこいつを真田紐さなだひもで右の包かみにつけるか、小弁慶こべんけいの木綿ことうりの蝙蝠傘こうもりがさを一本、おきまりだね。ちよいと見ると、いやどれもこれも克明こくめいで分別ぶんべつのありそうな顔かほをして。これが泊とまりに着くと、大形おびひろげの浴衣ゆかたに変わって、帯広解おびひろげで焼酎しょうちゆうをちびりちびり遣やりながら、旅籠屋はたごやの女のふとつた膝ひざへ脛すねを上げようという輩やからじゃ。

(これや、法界坊ほうかいぼう。)

なんて、天窓あたまから嘗なめていら。

(異おつなことをいうようだが何かね、世の中の女おんなが出来できねえと相あ場ばがきまつて、すつぺら坊主ぼうずになつてやつぱり生命いのちは欲しいの

かね、不思議じゃあねえか、争われねえもんだ、姉さん見ねえ、あれでまだ未練のある内がいいじゃあねえか、）といつて顔を見合せて二人でからからと笑った。

年紀は若し、お前様、私は真赤になった、手に汲んだ川の水を飲みかねて猶予つているとね。

ポンと煙管を払いて、

（何、遠慮をしねえで浴びるほどやんなせえ、生命が危くなりや、薬を遣らあ、そのために私がついてるんだぜ、なあ姉さん。おい、それだつても無銭じゃあいけねえよ、憚りながら神方万金丹、一貼三百だ、欲しくば買いな、まだ坊主に報捨をするような罪は造らねえ、それともどうだお前いうことを肯くか。）といつて茶店の女の背中を叩いた。

私はそうそうに遁出した。

いや、膝だの、女の背中だのといつて、いけ年を仕つた和尚が業体で恐入るが、話が、話じゃからそこはよろしく。」

## 四

「私も腹立紛れじや、無暗と急いで、それからどんどん山の裾を田圃道へかかる。」

半町ばかり行くと、路がこう急に高くなつて、上りが一カ処、横からよく見えた、弓形でまるで土で勅使橋がかかつてるような。上を見ながら、これへ足を踏懸けた時、以前の薬売がすたすたやつて来て追着いたが。

別に言葉も交さず、またものをいったからというて、返事をする気はこつちにもない。どこまでも人を凌いだ仕打な薬売は



流眄しりめにかけて故わざとらしゅう私わしを通越とおりこして、すたすた前へ出て、ぬつと小山のような路の突先とつさきへ蝙蝠傘を差して立つたが、そのまま向うへ下りて見えなくなる。

その後から爪先つまさき上り、やがてまた太鼓たいこの胴どうのような路の上へ体が乗った、それなりにまた下りくだじや。

売薬は先へ下りたが立停たちどまつてしきりに四辺あたりを眊みまわしている様子、執念しゅうねん深く何か巧たくんだかと、快からず続いたが、さてよく見ると仔細しさいがあるわい。

路はここで二条ふたすじになつて、一条いちじょうはこれからすぐに坂になつて上りも急なり、草も両方から生茂おいしげつたのが、路傍みちばたのその角かどの処のぼにある、それこそ四抱よかかえ、そうさな、五抱いつかかえもあろうという一本の檜ひのきの、背後うしろへ蜿うねつて切出したような大巖おおいわが二ツ三ツ四ツと並んで、上の方へ層かさなつてその背後へ通じているが、私わしが見当をつ

けて、心組んだのはこつちではないので、やつぱり今まで歩いて来たその幅の広いなだらかな方が正しく本道、あと二里足らず行けば山になって、それからが峠になるはず。

と見ると、どうしたことかき、今いうその檜じやが、そこらに何も無い路を横断つて見果のつかぬ田圃の中空へ虹のように突出ている、見事な。根方の処の土が壊れて大鰻を捏ねたような根が幾筋ともなく露れた、その根から一筋の水がさつと落ちて、地の上へ流れるのが、取つて進もうとする道の真中に流出してあたりは一面。

田圃が湖にならぬが不思議で、どうどうと瀬になつて、前途に一叢の藪が見える、それを境にしておよそ二町ばかりの間まるで川じゃ。礫はばらばら、飛石のようにひよいひよいと大跨で伝えそうにずっと見ごたえのあるのが、それでも人の手で並

べたに違ちがいはない。

もつとも衣服ぎものを脱いで渡るほどの大事なのではないが、本街道にはちと難儀なんぎ過ぎて、なかなか馬などが歩ある行かれる訳わけのものではないので。

売薬もこれで迷ったのであろうと思う内、切放きりはなれよく向むきを変えて右の坂をすたすたと上りはじめた。見る間まに檜うしろを後うしろに潜くぐり抜けると、私わしが体の上あたりへ出て下を向き、

(おいおい、松本まつもとへ出る路はこつちだよ、) といつて無造作むぞうさにまた五六歩。

岩の頭へ半身を乗出して、

(茫然ぼんやりしてると、木精こだまが攫さらうぜ、昼間だつて容赦ようしやはねえよ。) と

嘲あざけるがごとく言い棄すてたが、やがて岩の陰かげに入つて高い処の草かくに隠かくれた。

しばらくすると見上げるほどな辺あたりへ蝙蝠傘の先が出たが、木の枝えだとすれすれになつて茂しげみの中に見えなくなつた。

(どツこいしよ、)と暢のんき気なかけ声で、その流の石の上を飛とびとび々に伝つて来たのは、莫ござ塵の尻しりあて当をした、何にもつけない天てん秤びんぼう棒を片手で担ひやくしやういだ百姓じや。」

## 五

「さつきの茶店ちやみせからここへ来るまで、売薬の外は誰だれにも逢あわなんだことは申上げるまでもない。

今別ぎわれ際に声を懸かけられたので、先方むこうは道中の商売人と見ただけに、まさかと思つても氣迷きまよいがあるので、今朝けさも立ちぎわによく見て来た、前にも申す、その凶面きつめんをな、ここでも開けて見

ようとしていたところ。

(ちよいと伺うかがいとう存じますが、)

(これは何でござりまする、)と山国の人などは殊ことに出家と見ると丁寧ていねいにいつてくれる。

(いえ、お伺い申しますまでもございませませんが、道はやつぱりこれを素直まっすぐに参るのでございましょうな。)

(松本へ行かつしやる？ ああああ本道じゃ、何ね、この間の梅雨つゆに水が出て、とてつもない川さ出来たがすよ。)

(まだずつとどこまでもこの水でございましょうか。)

(何のお前様、見たばかりじゃ、訳はござりませぬ、水になつたのは向うのあの藪までで、後はやつぱりこれと同一道筋おなじで山までは荷車が並んで通るでがす。藪のあるのは旧もと大きいお邸やしきの医者様の跡でな、ここいらはこれでも一ツの村でがした、十三

年前の大水の時、から一面に野良のらになりましたよ、人死ひとしにもいけ  
えこと。ご坊様ぼうさま歩ある行きながらお念仏でも唱えてやつてくれさつ  
しやい。）と問わぬことまで深切しんせつに話します。それでよく仔細しさいが  
解わかつて確たしかになりはなつたけれども、現に一人踏迷ふみまよつた者がある。  
（こちらの道はこりやどこへ行くので、）といつて売薬の入つた  
左手ゆんでの坂を尋たずねて見た。

（はい、これは五十年ばかり前までは人が歩ある行いた旧道でがす。  
やつぱり信州へ出まする、先は一つで七里ばかり総体近うござ  
りまするが、いや今時いまじき往來の出来るのじゃあござりませぬ。去年  
もご坊様、親子連づれの巡礼じゆんれいが間違えて入つたというで、はれ大變  
な、乞食こじきを見たような者じやというて、人命に代りはねえ、追おっか  
けて助けべえと、巡査おまわりさま様が三人、村の者が十二人、一組になつ  
てこれから押登おしあがりつて、やつと連れて戻もどつたくらいでがす。ご坊

様も血氣に逸はやつて近道をしてはなりましねえぞ、草臥くたびれて野宿をしてからがここを行かつしやるよりはましでござるに。はい、氣を付けて行かつしやれ。

ここで百姓に別れてその川の石の上を行こうとしたがふと猶ためら予つたのは売薬の身の上で。

まさかに聞いたほどでもあるまいが、それが本当ならば見殺みごろしじゃ、どの道私は出家しゅつげの体、日が暮くれるまでに宿へ着いて屋根の下に寝るには及およばぬ、追おつついて引戻してやろう。罷違まかりちごうて旧道あを皆歩ある行あいても怪けしゆうはあるまい、こういう時候おじゃ、狼おおかみの匂しゆんでもなく、魑魅魍魎ちみもうりようの汐しおさきでもない、ままよ、と思おもうて、見送ると早はや深切な百姓の姿も見えぬ。

(よし。)

思切おもいきつて坂道を取つて懸かつた、俠氣おとこぎがあつたのではござらぬ、

血氣に逸はやつたではもとよりにない、今申したようではずつともう悟さとつたようじゃが、いやなかなかの臆病者、川の水を飲むのさえ気が怯ひけたほど生命いのちが大事で、なぜまたと謂いわつしやるか。ただ挨拶あいさつをしたばかりの男なら、私は実のところ、打棄うちちやつておいたに違いはないが、快からぬ人と思つたから、そのままで見棄てるのが、故わざとするようで、気が責めてならなんだから、と宗朝はやはり俯向うつむけに床とこに入つたまま合掌がつしようしていった。「それでは口でいう念仏にも濟まぬと思うてさ。」

## 六

「さて、聞かつしやい、私はそれから檜ひのきの裏を抜けた、岩の下から岩の上へ出た、樹きの中を潜くぐつて草深い径こみちをどこまでも、ど



こまでも。

するといつの間にか今上つた山は過ぎてまた一ツ山が近ちかづいて来た、この辺あたりしばらくの間は野が広々として、さつき通つた本街道よりもつと幅の広い、なだらかな一筋道。

心持こころもち西と、東と、真中まんなかに山を一ツ置いて二条並ふたすじんだ路のよう  
な、いかさまこれならば槍やりを立てても行列が通つたであろう。

この広ひろツ場ばでも目の及ぶ限り芥子粒けしつぶほどの大きさの売薬おおくの姿も見  
ないで、時々焼けるような空を小さな虫が飛び歩あ行るいた。

歩あ行るくにはこの方が心細い、あたりがぱツとしていと便たよりが  
ないよ。もちろん飛驒越ひだごえと銘めいを打つた日には、七里に一軒十里  
に五軒という相場、そこで粟あわの飯にありつけば都合も上じょうの方と  
いうことになっております。それを覚悟かくごのことで、足は相応に  
達者、いや屈くつせずに進んだ進んだ。すると、だんだんまた山が

両方から逼せまつて来て、肩に支つかえそうな狭いとこになつた、すぐのぼりに上のぼり。

さあ、これからが名代なだいの天生峠あもうと心得たから、こつちもその気になつて、何しろ暑いので、喘あえぎながらまず草鞋わらじの紐ひもを緊直しめなおした。

ちようどこの上口のぼりぐちの辺に美濃みのの蓮大寺れんだいじの本堂ゆかしたの床下ふきぬまで吹抜かざあなけの風穴かざあながあるということとを年経としつてから聞ききましたが、なかそこどころの沙汰さたではない、一生懸命いっしょうけんめい、景色けしきも奇跡きせきもあるものかい、お天気さえ晴れたか曇曇つたか訳まが解まらず、目まじろぎもしないですたすたと捏こねて上のぼる。

とお前様お聞かせ申す話は、これからじゃが、最初に申す通り路みちがいかに悪い、まるで人が通いそうでない上に、恐おそしいのは、蛇へびで。両方くさむらの叢くさむらに尾と頭とを突込んで、のたりと橋を渡

しているではあるまいか。

私は真先に<sup>わし まつさき</sup>出會した時は笠を被つて<sup>でつくわ かさ かぶ</sup>竹杖を突いたまま、はつと息を引いて膝を折つて<sup>ひざ すわ</sup>坐つたて。

いやもう生得<sup>しょうとくだい</sup>大嫌、嫌<sup>きらひ</sup>というより恐怖<sup>こわ</sup>いのでな。

その時はまず人助けに<sup>かまくび</sup>ずると尾を引いて、向うで鎌首を上げたと思うと草をさらさらと渡つた。

ようよう<sup>おきあが</sup>起上つて道の五六町も行くと、またおなじように、<sup>どうなか</sup>胴中を乾かして尾も首も見えぬのが、ぬたり！

あつというて飛退<sup>とびの</sup>いたが、それも隠れた。三度目に出會つたのが、いや急には動かず、しかも胴体の太さ、たとい這出<sup>はいだ</sup>したところ<sup>また</sup>でぬらぬらとやられてはおよそ五分間ぐらい尾を出すまでに間<sup>ま</sup>があろうと思う長虫と見えたので、やむことをえず私<sup>わし</sup>は跨<sup>また</sup>ぎ越した、とたんに下腹<sup>したつばら</sup>が突張<sup>つつば</sup>つてぞつと身の毛、毛穴が残

らず鱗うろこに變つて、顔の色もその蛇のようになったらうと目を塞ふさいだくらい。

絞しぼるような冷汗ひやあせになる気味の悪さ、足が竦すくんだというて立つていられる数すうではないからびくびくししながら路を急ぐとまたしても居たよ。

しかも今度のは半分ひつきに引切つてある胴から尾ばかりの虫じや、切口あおみが蒼あおみを帯びてそれでこゝう黄色な汁しるが流れてびくびくと動いたわ。

我を忘れてばらばらとあとへ遁にげ歸つたが、気が付けば例またのがまだ居るのであろう、たとい殺されるまでも二度とはあれを跨またぐ気はせぬ。ああさっきのお百姓まちががものの間違ふるみちでも故道ふるみちには蛇がこゝうといつてくれたら、地獄じじくへ落ちても来なかつたにと照りつけられて、涙なみだが流れた、南無阿弥陀仏なむあみだぶつ、今でもぞつとする。」と

額に手を。

七

「果が<sup>はてし</sup>無いから<sup>きも</sup>肝を<sup>す</sup>据えた、もとより引返す分ではない。旧の<sup>もと</sup>処<sup>ところ</sup>にはやっぱり<sup>じょうた</sup>丈足らずの骸<sup>むくろ</sup>がある、遠くへ<sup>さ</sup>避けて草の中へ<sup>か</sup>駈け抜けたが、今にもあとの半分が<sup>まと</sup>絡いつき<sup>たま</sup>そうで耐<sup>た</sup>らぬから<sup>きおくれ</sup>氣臆<sup>きおくれ</sup>がして足が<sup>すじば</sup>筋張ると石に<sup>つまず</sup>躓いて<sup>ひざぶし</sup>転んだ、その時<sup>ひざぶし</sup>膝節を<sup>ひざぶし</sup>痛めまし  
たものと見える。

それから<sup>たお</sup>ぐがくして<sup>あ</sup>歩<sup>ある</sup>行くのが少し<sup>なんじゆう</sup>難<sup>なんじゆう</sup>渋<sup>じゆう</sup>になつたけれども、  
ここで<sup>たお</sup>倒<sup>たお</sup>れては<sup>うんき</sup>温<sup>うんき</sup>氣<sup>き</sup>で<sup>むしころ</sup>蒸<sup>むしころ</sup>殺<sup>ころ</sup>されるばかり<sup>おそろ</sup>じゃと、我身<sup>おそろ</sup>で我身<sup>おそろ</sup>を  
激<sup>はげ</sup>ま<sup>はげ</sup>して<sup>おそろ</sup>首<sup>おそろ</sup>筋<sup>おそろ</sup>を取<sup>おそろ</sup>つて<sup>おそろ</sup>引<sup>おそろ</sup>立<sup>おそろ</sup>てる<sup>おそろ</sup>よう<sup>おそろ</sup>にして<sup>おそろ</sup>峠<sup>おそろ</sup>の方<sup>おそろ</sup>へ。  
何<sup>おそろ</sup>しろ<sup>おそろ</sup>路<sup>おそろ</sup>傍<sup>おそろ</sup>の<sup>おそろ</sup>草<sup>おそろ</sup>い<sup>おそろ</sup>き<sup>おそろ</sup>れ<sup>おそろ</sup>が<sup>おそろ</sup>恐<sup>おそろ</sup>しい、大<sup>おそろ</sup>鳥<sup>おそろ</sup>の<sup>おそろ</sup>卵<sup>おそろ</sup>見<sup>おそろ</sup>た<sup>おそろ</sup>よう<sup>おそろ</sup>な<sup>おそろ</sup>もの<sup>おそろ</sup>な

んぞ足許あしもとにごろごろしている茂り塩梅あんばい。

また二里ばかり大蛇おろちの蜿うねるような坂を、山懐やまぶところに突当つきあたつて岩角を曲つて、木の根を繞めぐつて参まつたがここのことで余りの道じやつたから、参謀本部さんぼうの絵図面を開いて見ました。

何やつぱり道はおんなじで聞いたにも見たのにも変かわりはない、旧道はこちらに相違はないから心遣こころやりにも何にもならず、もとより歴れつきとした図面というて、描かいてある道はただ栗くりの毬いの上へ赤い筋が引張つてあるばかり。

難儀なんぎさも、蛇も、毛虫も、鳥の卵も、草いきれも、記してあるはずはないのじゃから、さつぱりと畳たたんで懐ふところに入れて、うむとこの乳うちの下へ念仏を唱え込んで立直つたはよいが、息も引かぬ内うちに情無なさけない長虫が路を切つた。

そこでもう所詮しよせん叶かなぬと思つたなり、これはこの山の霊れいであ

ろうと考えて、杖を棄てて膝を曲げ、じりじりする地に両手をついて、

(誠に済みませぬがお通しなすつて下さりまし、なるたけお午睡の邪魔になりませぬようにそつと通行いたしまする。

ご覧の通り杖も棄てました。)と我折れしみじみと頼んで額を上げるとざつという凄じい音で。

心持よほどの大蛇と思つた、三尺、四尺、五尺四方、一丈余、だんだんと草の動くのが広がつて、傍の溪へ一文字にさつと靡いた、果は峰も山も一斉に揺いだ、恐毛を震つて立竦むと涼しさが身に染みて、気が付くと山風よ。

この折から聞えはじめたのはどつとという山彦に伝わる響、ちようど山の奥に風が渦巻いてそこから吹起る穴があいたように感じられる。

何しろ山靈感応あつたか、蛇は見えなくなり暑さも凌しのぎよくなつたので、気も勇いさみ足も撈はかど取つたが、ほどなく急に風が冷たくなつた理由を会得えとくすることが出来た。

というのは目の前に大森林があらわれたので。

世たとえの譬あもにも天生あも峠は蒼空あおぞらに雨が降るといふ、人の話にも神代かみよからそま杣まが手を入れぬ森があると聞いたのに、今までは余り樹がなすぎた。

今度は蛇のかわりに蟹かにが歩きそうわらじで草鞋わらじが冷えた。しばらくすると暗くなつた、杉、松、榎えのきと処々ところどころ見分けが出来るばかりに遠い処かすかから幽かすかに日の光の射さすあたりでは、土の色が皆黒い。中には光線が森を射通いとす工合ぐあいであろう、青だの、赤だの、ひだが入いつて美しい処かがあつた。

時々爪尖つまさきに絡からまるのは葉しずくの雫おちたまの落溜おちたまつた糸ながれのような流ながれで、こ



れは枝を打つて高い処を走るの。ともするとまた常磐木とぎわぎが落葉する、何の樹とも知れずばらばらと鳴り、かさかさと言がしてぱつと檜笠ひのきがさにかかることもある、あるいは行過ぎた背後うしろへこぼれるのもある、それ等は枝から枝に溜たまつていて何十年ぶりではじめて地の上まで落ちるのか分らぬ。」

## 八

「心細きは申すまでもなかつたが、卑怯ひきようなようでも修行しゆぎようの積まぬ身には、こういう暗い処の方がかえつて観念たよりに便たよりがよい。何しろ体が凌しのぎよくなつたために足の弱よわりも忘れたので、道も大きに抄取はかどつて、まずこれで七分は森の中を越したろうと思ふ処で五六尺あたま天窗の上らしかつた樹の枝から、ぼたりと笠の上へ落ち

留まつたものがある。

なまり おもり  
鉛の錘かとおもう心持、何か木の実でもあるかしらんと、  
二三次度振つてみたが附着くツついていてそのままには取れないから、  
何心なく手をやつて掴つかむと、滑なめらかに冷ひやりと来た。

見ると海鼠なまこを裂さいたような目も口もない者じゃが、動物には  
違ちがいない。不気味で投出すべそうとするとずるずるとすべ込こんで指の尖さき  
へ吸すついてぶらりと下つた、その放れた指の尖から真赤な美し  
い血が垂たらたらと出たから、吃驚びっくりして目の下へ指をつけてじつと見  
ると、今折曲ひじげた肱ひじの処へつると垂懸たれかかつてゐるのは同形おなじかたちをし  
た、幅が五分、丈たけが三寸ばかりの山海鼠やまなまこ。

あつけ  
呆氣あつけに取られて見る見る内に、下の方から縮みながら、ぶく  
ぶくと太つて行くのは生血いきちをしたたかに吸込にじむせいで、濁にごつた  
黒い滑らかな肌はだに茶褐色ちやかっしよくの縞しまをもつた、疣胡瓜いぼきゅうりのような血を取

る動物、こいつは蛭ひるじゃよ。

誰たが目にも見違えるわけのものではないが、図ず抜ぬて余り大きいからちよつとは気がつかぬであつた、何の畠はたけでも、どんな履歴りれきのある沼ぬまでも、このくらいな蛭はあろうとは思われぬ。

肱うでをばさりと振ふるつたけれども、よく喰くい込こんだと見えてなかなか放れそうにしないから不気味ぶきみながら手で抓つかんで引切ると、ぶつりといつてようよう取れる、しばらくも耐たつたものではない、突然いきなり取つて大地へ叩たたきつけると、これほどの奴等やつらが何万となく巢わがをくつて我ものにしていようという処、かねてその用意はしていると思われるばかり、日のあたらぬ森の中の土は柔やわらかい、潰つぶれそうにもないのじゃ。

ともはや頸えりのあたりがむずむずして来た、平手ひらてで扱こいて見ると横撫よこなでに蛭の背せなをぬるぬるとすべるといふ、やあ、乳の下へ潜ひそん

で帯の間にも一疋びき、蒼あおくなつてそツと見ると肩の上にも一筋。

思わず飛上つて総身そうしんを震いながらこの大枝の下を一散にかけぬけて、走りながらまず心覚えの奴むすこだけは夢中むちゆうでもぎ取つた。

何にしても恐しい今の枝には蛭なが生なつていたのであろうとあまりの事に思つて振返ると、見返つた樹の何の枝か知らずやつぱり幾いくツということもない蛭の皮じや。

これはと思う、右も、左も、前の枝も、何の事はないまるで充満いつぱい。

私は思わず恐怖きようふの声を立てて叫さけんだ、すると何と？ この時は目に見えて、上からぼたりぼたりと真黒な瘦やせた筋の入つた雨が体へ降かかつて来たではないか。

草鞋わらじを穿はいた足の甲こうへも落ちた上へまた累かさなり、並んだ傍わきへまた附着くつついて爪先つまさきも分らなくなつた、そうして活いきてると思うだ

け脈を打つて血を吸うような、思いなしか一ツ一ツ伸縮のびちぢみをするようなのを見るから気が遠くなつて、その時不思議な考えが起きた。

この恐しい山蛭やまびるは神代かみよの古いにしえからここに屯たむろをしていて、人の来るのを待ちつけて、永い久しい間にどのくらい何斛なんごくかの血を吸うと、そこでこの虫の望のぞみが叶かなう、その時はありつたけの蛭が残らず吸つただけの人間の血を吐出はきだすと、それがために土がとけて山一ツ一面に血と泥どろとの大沼にかわるであろう、それと同時にここに日の光を遮さえぎつて昼もなお暗い大木が切々きれぎれに一ツ一ツ蛭になつてしまふのに相違そういないと、いや、全くの事で。」

「およそ人間が滅びるのは、地球の薄皮うすかわが破れて空から火が降るのでなければ、大海が押被おつかぶさるのでもない、飛驒国ひだのくにの樹林きばやしが蛭になるのが最初で、しまいには皆血みんなと泥の中に筋の黒い虫が泳ぐ、それが代だいがわりの世界であろうと、ぼんやり。

なるほどこの森も入口では何の事もなかったのに、中へ来るとこの通り、もつと奥深く進んだら早はや残らず立樹たちぎの根の方から朽くちて山蛭いんねんになつていよう、助かるまい、ここで取殺とされる因縁いんねんらしい、取留とりとめのない考えが浮んだのも人が知死期ちしごに近いちかつたからだとふと気が付いた。

どの道死ぬるものなら一足でも前へ進んで、世間の者が夢ゆめにも知らぬ血と泥の大沼の片端かたはしでも見ておこうと、そう覚悟かくごがきまつては気味の悪いも何もあつたものじゃない、体中珠数生じゆずなりになつたのを手当次第てあたりに掻かい除のけ撈むしり棄すて、抜き取りなどして、

手を挙げ足を踏んで、まるで躍り狂う形で歩行き出した。

はじめの中は一廻も太ったように思われて痒さが耐らなかつたが、しまいにはげつそり瘦せたと感じられてずきずき痛んでならぬ、その上を容赦なく歩行く内にも入交りに襲いおつた。

既に目も眩んで倒れそうになると、禍はこの辺が絶頂であつたと見えて、隧道を抜けたように、遙に一輪のかすれた月を拝んだのは、蛭の林の出口なので。

いや蒼空の下へ出た時には、何のことも忘れて、碎ける、微塵になれと横なぐりに体を山路へ打倒した。それでからもう砂利でも針でもあれと地へこすりつけて、十余りも蛭の死骸を引くりかえした上から、五六間向うへ飛んで身顛をして突立った。

人を馬鹿にしているではありませんか。あたりの山では処々茅蝸殿、血と泥の大沼になろうという森を控えて鳴いている、

日は斜ななめ、溪底たにそこはもう暗い。

まずこれならば狼おおかみの餌食えじきになつてもそれは一思ひとおもひに死なれるからと、路はちようどだらだら下おりなり、小僧さん、調子はずれに竹の杖を肩にかついで、すたこら遁にげたわ。

これで蛭に悩まされて痛いのか、痒かゆいのか、それとも擦くすくつたいのか得えもいわれぬ苦しみさえなかつたら、嬉うれしさに独ひとり飛驒山越ひだやまごえの間道かんどうで、お経きやうに節ふしをつけて外道踊げどうおどりをやつたであらう、ちよつと清心丹せいしんたんでも嚙かみ砕くだいて疵口きずぐちへつけたらどうだと、だいぶ世の中の事に気がついて来たわ。抓つねつても確たしかに活返いきかえつたのじゃが、それにして富山の葉売はどうしたろう、あの様子ではとうに血になつて泥沼きたなに。皮ばかりの死骸は森の中の暗い処、おまけに意地の汚きたない下司げすな動物が骨までしゃぶろうと何百という数でのしかかつていた日には、酢すをぶちまけても分る気遣きづかいはあるまい。



こう思っている間、件のだらだら坂は大分長かった。

それを下り切ると流が聞えて、とんだ処に長さ一間ばかりの土橋がかかっている。

はやその谷川の音を聞くと我身で持余す蛭の吸殻を真逆に投込んで、水に浸したらさぞいい心地であろうと思うくらい、何の渡りかけて壊れたらそれなりけり。

危いとも思わずにずっと懸る、少しぐらぐらしたが難なく越した。向うからまた坂じゃ、今度は上りさ、ご苦労千万。」

## 十

「とてもこの疲れようでは、坂を上るわけには行くまいと思つたが、ふと前途に、ヒイインと馬の嘶くのが咄して聞えた。

馬士まごが戻るもどのか小荷駄こにだが通るか、今朝一人の百姓に別れてから時の経へだつたは僅わずかじやが、三年も五年も同一おんなじものをいう人間とは中を隔へだてた。馬が居るようではともかくも人里に縁があると、これがために気が勇んで、ええやつと今一揉ひともみ。

一軒の山家やまがの前へ来たのには、さまで難儀なんぎは感じなかつた。夏のこととて戸障子のしまりもせず、殊ことに一軒家、あけ開いたなり門というでもない、突然破縁いきなりやれえんになつて男が一人、私わしはもう何の見境もなく、

(頼たのみます、頼たのみます) というさえ助たすけを呼ぶような調子で、取継とりすがらぬばかりにした。

(ご免めんなさいまし) といったがものもいわない、首筋をぐつたりと、耳を肩で塞ふさぐほど顔を横にしたまま小児こどもらしい、意味のない、しかもぼつちりした目で、じろじろと門に立つたものを

瞻<sup>みつ</sup>める、その瞳<sup>ひとみ</sup>を動かすさえ、おつくうらしい、気の抜けた身の持方。裾<sup>すそ</sup>短<sup>みじ</sup>かで袖<sup>そで</sup>は肱<sup>ひじ</sup>より少い、糊<sup>のり</sup>氣のある、ちゃんちゃんを着て、胸のあたりで紐<sup>ひも</sup>で結<sup>ゆわ</sup>えたが、一ツ身のものを着たように出ツ腹の太<sup>じし</sup>り肉、太鼓<sup>たいこ</sup>を張<sup>たい</sup>ったくらいに、すべすとふくれてしかも出臍<sup>でべそ</sup>という奴<sup>やつ</sup>、南瓜<sup>かぼちゃ</sup>の蒂<sup>へた</sup>ほどな異形<sup>いぎよう</sup>な者を片手<sup>ひとて</sup>でいじくりながら幽霊<sup>ゆうれい</sup>の手つきで、片手を宙にぶらり。

足は忘れたか投出した、腰がなくば暖簾<sup>のれん</sup>を立てたように畳<sup>たた</sup>まれそうな、年<sup>とし</sup>紀<sup>き</sup>がそれでいて二二三、口をあめぐりやつた上唇<sup>うわくちびる</sup>で巻込めよう、鼻の低<sup>ひ</sup>さ、出額<sup>でびたい</sup>。五分刈<sup>ごぶがり</sup>の伸<sup>の</sup>びたのが前は鶏冠<sup>とさか</sup>のごとくになって、頸<sup>えり</sup>脚<sup>あし</sup>へ撥<sup>は</sup>ねて耳<sup>みみ</sup>に被<sup>かぶ</sup>った、唾<sup>おし</sup>か、白痴<sup>ばか</sup>か、これから蛙<sup>かえる</sup>になろうとするような少年。私<sup>わし</sup>は驚いた、こつちの生命<sup>いのち</sup>に別条<sup>わか</sup>はないが、先方<sup>さきさま</sup>様の形相<sup>ぎようそう</sup>。いや、大別条<sup>おおべつじよう</sup>。(ちよいとお願い申します。)

それでもしかたがないからまた言葉をかけたが少しも通ぜず、  
 ばたりというわずかと僅に首の位置をかえて今度は左の肩を枕まくらにした、  
 口の開いてること旧もとのごとし。

こういうのは、悪くすると突然いきなりふんづかまえて臍ひねを捻りなが  
 ら返事のかわりに嘗なめようも知れぬ。

私わしは一足退すきつたが、いかに深山だといつてもこれを一人で置  
 くという法はあるまい、と足を爪つまだ立てて少し声高こわだかに、

(どなたぞ、ご免なさい) といった。

背戸せどと思うあたりで再び馬の嘶いななく声。

(どなた) と納戸なんどの方でいったのは女じゃから、南無三宝、こ  
 の白い首には鱗うろこが生えて、体は床ゆかを這はつて尾をずると引い  
 て出ようと、また退すきつた。

(おお、お坊様ほうさま) と立頭たちあらわれたのは小造こづくりの美しい、声も清すずしい、

ものやさしい。

私は大息を吐いて、何にもいわず、

(はい。)と頭を下げましたよ。

婦人は膝をついて坐つたが、前へ伸上るようにして、黄昏に

しょんぼり立つた私が姿を透かして見て、

(何か用でござんすかい。)

休めともいわずはじめから宿の常世は留守らしい、人を泊め

ないときめたもののように見える。

いい後れてはかえつて出そびれて頼むにも頼まれぬ仕誼にも

なることと、つかつかと前へ出た。

丁寧ていねいに腰かかを屈かめて、

(私は、山越で信州へ参ります者ですが旅籠はたごのございます処ま

ではまだどのくらいでございましょう。)

(あなたはまだ八里余あまりでございますよ。)

(その他ほかに別に泊めてくれます家うちもないのでしようか。)

(それはございませぬ。)&small(いいながら目またたきもしないで清すずしい目で私の顔わしをつくづく見ていた。)

(いえもう何でございます、実はこの先一町行け、そうすれば上段へやの室むろに寝かして一晩あ扇あいでいてそれで功德くどくのためにする家があるうけたまわると承りましても、全くのところ一足も歩行あけますのではございませぬ、どこの物置ものおきでも馬小屋うまの隅すみでもよいのでございませぬから後生ごしやうでございます。)&small(ときつき馬うまが嘶いなないたのは此家ここより外にはないと思つたから言つた。)

婦人おんなはしばらく考えていたが、ふと傍わきを向いて布ふの袋くろを取つて、膝ひざのあたりに置いた桶おけの中へざらざらと一幅ひとば、水を溢こぼすようにあけて縁ふちをおさえて、手で掬すくつて俯うつむ向いて見たが、

(ああ、お泊め申しましょう、ちようど炊たいてあげますほどお米もございますから、それに夏のことと、山家は冷えましても夜のものにご不自由もござんすまい。さあ、ともかくもあなた、お上り遊ばして。)

というと言葉の切れぬ先にどつかと腰を落した。婦人おんなはつと身を起して立つて来て、

(お坊様、それでござんすがちよつとお断り申しておかねばなりません。)

はつきりいわれたので私わしはびくびくもので、

(はい、はい。)

(いいえ、別のことじゃござんせぬが、私は癖として都の話を聞くのが病でございます、口に蓋をしておいでなさいまして無理やりに聞こうといたしますが、あなた忘れてもその時間かして下さいますな、ようござんすかい、私は無理にお尋ね申します、あなたはどうしてもお話しなさいませぬ、それを是非にと申しまして断つておっしゃらないようにきつと念を入れておきますよ。)

と仔細ありげなことをいった。

山の高さも谷の深さも底の知れない一軒家の婦人の言葉とは思ふたが保つにむずかしい戒でもなし、私はただ頷くばかり。(はい、よろしゅうございます、何事もおっしゃりつけは背きません。)

婦人は言下に打解けて、



(さあさあ汚きたのうございしますが早くこちらへ、お寛くつろぎなさいまし、そうしてお洗せんそく足を上げましょうかえ。)

(いえ、それには及びませぬ、雑巾ぞうきんをお貸し下さいまし。ああ、それからもしそのお雑巾ついで次手にずッぷりお絞しぼんなすつて下さると助たすかります、途中とちゆうで大変な目に逢あいましたので体を打う棄ちりたいほど気味が悪うございますので、一ツ背中を拭ふこうと存じます、恐おそれい入りますな。)

(そう、汗あせにおなりなさいました、さぞまあ、お暑うござんしたでしょう、お待ちなさいまし、旅籠はたごへお着き遊あそばして湯にお入りなさいませるのが、旅するお方には何よりご馳走ちそうだと申しますね、湯どころか、お茶さえ碌ろくにおもてなしもいたされませんが、あの、この裏がけの崖を下りますと、綺麗きれいな流ながれがございしますからいつそそれへいらつしゃッてお流しがよろしゆうございましてよ

う。

聞いただけでも飛んでも行きたい。

(ええ、それは何より結構でございますな。)

(さあ、それではご案内申しましょう、どれ、ちようど私も米を磨とぎに参ります。)と件の桶くだんを小脇おけに抱かかえて、縁えん側がわから、藁わら草履ぞうりを穿はいて出たが、屈かがんで板縁いたえんの下を覗のぞいて、引出したのは一足の古下駄げたで、かちりと合あわして埃ほこりを払はたいて揃そろえてくれた。

(お穿はきなさいまし、草鞋わらじはここにお置きなすつて、)

私わしは手をあげて、一礼して、

(恐入ります、これはどうも、)

(お泊め申すとなりましたら、あの、他生たしようの縁えんとやらでござんす、あなたご遠慮を遊ばしますなよ。)まず恐しく調子がいいじやて。」

「(さあ、私に跟ついてこちらへ、)と件の米磨桶こめとぎおけを引抱ひつかかえて手拭てぬぐいを細い帯おびに挟はさんで立たった。

髪かみは房ふつぎりとするのを束たばねてな、櫛くしをはさんで簪かんざしで留とめている、その姿すがたの佳よさというてはなかつた。

私わたしも手早く草鞋わらじを解といたから、早速古下駄こげだを頂戴ちやうだいして、縁えりから立たつ時ときちよいと見みると、それ例れいの白痴ばかど殿どのじゃ。

同じく私わたしが方かたをじろりと見みたつけよ、舌した不足たらずが饒舌しゃべるような、愚ぐにもつかぬ声こゑを出だして、

(姉ねえや、こえ、こえ。)といいながら気けだるそうに手てを持もち上げてその蓬ぼう々と生なえた天窓あたまを撫なでた。

(坊さま、坊さま?)

すると婦人が、下ぶくれな顔にえくぼを刻んで、三ツばかりはきはきと続けて頷いた。

少年はうむといったが、ぐたりとしてまた臍をくりくりくり。  
私は余り気の毒さに顔も上げられないでそつと盗むようにして見ると、婦人は何事も別に気に懸けてはおらぬ様子、そのま  
ま後へ跟いて出ようとする時、紫陽花の花の蔭からぬいと出た  
一名の親仁がある。

背戸から廻つて来たらしい、草鞋を穿いたなりで、胴乱の根付  
を紐長にぶらりと提げ、銜煙管をしながら並んで立停つた。

(和尚様おいでなさい。)

婦人はそなたを振向いて、

(おじ様どうぞごんした。)

(さればさきの、頓馬とんまで間の抜けたといふのはあのことかい。根ツから早や狐きつねでなければ乗せ得そうにもない奴やつじゃが、そこはおらが口じゃ、うまく仲人なこうどして、二月ふたつきや三月みつきはお嬢様じょうさまがご不自由のねえように、翌日あすはものにしてうんとここへ担かつぎ込みます。)

(お頼み申しますよ。)

(承知、承知、おお、嬢様どこさ行かつしやる。)

(崖の水までちよいと。)

(若い坊様連れて川へ落つこちさつしやるな、おらここに眼張がんばつて待つとるに、)と横様よこさまに縁ゆかりにのさり。

(貴僧あなた、あんなことを申しますよ。)と顔を見て微笑ほほえんだ。

(一人で参りましょう、)と傍わきへ退のくと、親仁おやしはくつくつと笑つて、

(はははは、さあ、早くいつてござらつせえ。)

(おじ様、今日はお前、珍しいお客がお二方ございました、こういう時はあとからまた見えようも知れませんが、次郎さんばかりでは来た者が弱んなさろう、私が帰るまでそこに休んでいておくれでないか。)

(いいとももの。)といいかけて、親仁は少年の傍へにじり寄って、鉄挺を見たような拳で、背中をどんとくらわした、白痴の腹はだぶりとして、べそをかくような口つきで、にやりと笑う。

私はぞつとして面を背けたが、婦人は何気ない体であった。  
親仁は大口を開いて、

(留守におらがこの亭主を盗むぞよ。)

(はい、ならば手柄でござんす、さあ、貴僧参りませうか。)  
背後から親仁が見るように思ったが、導かるるままに壁について、かの紫陽花のある方ではない。

やがて背戸と思う処で左に馬小屋を見た、ことごとくという音は羽目を蹴るのであろう、もうその辺から薄暗くなつて来る。  
（貴僧、ここから下りるのでございます、迂りはいたしませぬが、道が酷うございますからお静に、）という。」

## 十三

「そこから下りるのだと思われる、松の木の細くツて度外れに背の高い、ひよろひよろしたおよそ五六間上までは小枝一ツもないのがある。その中を潜つたが、仰ぐと梢に出て白い、月の形はここでも別にかわりは無かつた、浮世はどこにあるか十三夜で。」

先へ立つた婦人の姿が目さきを放れたから、松の幹に掴まつ

て覗くと、つい下に居た。

仰向いて、

（急に低くなりますから気をつけて。こりや貴僧には足駄では無理でございましたかしら、宜しくば草履とお取交え申しませう。）

立後れたのを歩行悩んだと察した様子、何がさて転げ落ちても早く行って蛭の垢を落したさ。

（何、いけませんければ跣足になります分のこと、どうぞお構いなく、嬢様にご心配をかけては済みません。）

（あれ、嬢様ですつて、）とやや調子を高めて、艶麗に笑った。

（はい、ただいまあの爺様が、さよう申しましたように存じますが、夫人でございませうか。）

（何にしても貴僧には叔母さんくらいな年紀ですよ。まあ、お



早くいらつしやい、草履もようござんすけれど、刺がささりま  
すといけません、それにじくじく湿れていてお気味が悪うござ  
いましょうから。」と向う向でいいながら衣服の片褌をぐいとあ  
げた。真白なのが暗まぎれ、歩行くと霜が消えて行くような。  
ずんずんずんと道を下りる、傍らの叢から、のさのさと  
出たのは蟻で。

（あれ、気味が悪いよ。）というと婦人は背後へ高々と踵を上げ  
て向うへ飛んだ。

（お客様がいらつしやるではないかね、人の足になんか搦まつ  
て、贅沢じゃあないか、お前達は虫を吸っていればたくさんだ  
よ。

あなた  
貴僧ずんずんいらつしやいましたな、どうもしはしません。こ  
う云う処ですからあんなものまで人懐しゆうございます、厭じや

ないかね、お前達と友達をみたようで愧はずかしい、あれいけませんよ。）

墓はのさのさとまた草を分けて入った、婦人おんなはむこうへずいと。

（さあこの上へ乗るんです、土が柔かで壊くえますから地面は歩行あるかれません。）

いかにも大木の僵たおれたのが草がくれにその幹をあらわしている、乗ると足駄穿あしだばきで差支さしつかえがない、丸木だけれどもおそろしく太いので、もつともこれを渡り果てるとたちまち流ながれの音が耳に激げきした、それまでにはよほどの間あいだ。

仰いで見ると松の樹きはもう影も見えない、十三夜の月はずつと低うなつたが、今下りた山の頂いただきに半ばかかつて、手が届きそうにあざやかだけれども、高さはおよそ計り知られぬ。

(貴僧、こちらへ。)

といった婦人はもう一息、目の下に立って待っていた。

そこは早や一面の岩で、岩の上へ谷川の水がかかつてここによどみを作っている、川幅は一間ばかり、水に臨めば音はさまざまにもないが、美しきは玉を解いて流したよう、かえつて遠くの方で凄じく岩に砕ける響がする。

向う岸はまた一座の山の裾で、頂の方は真暗だが、山の端からその山腹を射る月の光に照し出された辺からは大石小石、栄螺のようなの、六尺角に切出したの、剣のようなのやら、鞠の形をしたのやら、目の届く限り残らず岩で、次第に大きく水に蘸つたのはただ小山のよう。」

「(いい塩梅あんばいに今日は水がふえておりますから、中へ入りませんでもこの上でようございます。)

と甲ひたを浸して爪先つまさきを屈かがめながら、雪のような素足で石の盤ばんの上に立っていた。

自分達が立った側かわは、かえってこっちの山の裾が水に迫って、ちようど切穴の形になって、そこへこの石を嵌はめたようあつらえな詭お川上も下流も見えぬが、向うのあの岩山、九十九折つづらおりのような形、流は五尺、三尺、一間ばかりずつ上流の方がだんだん遠く、飛とびとび々に岩をかがったように隠見いんけんして、いずれも月光を浴びた、銀の鎧よろいの姿、目まのあたり近いのはゆるぎ糸いとを捌さばくがごとく真白ひるがえに翻つて。

(結構な流れでございますな。)

(はい、この水は源たぎが滝たきでございます、この山を旅するお方は皆み

な大風のような音をどこかで聞きます。貴僧あなたはこちらへいらつしやる道でお心着やまびるきはなさいませんかい。）

さればこそ山蛭やおやぶの大藪へ入ろうという少し前からその音を。

（あれは林へ風の当るのではございませんので？）

（いえ、誰たれでもそう申します、あの森から三里ばかり傍道わきみちへ入りました処に大滝があるのでございます、それはそれは日本一だそうですが、路みちが嶮けわしゆうござんすので、十人に一人参つたものはございません。その滝が荒あれましたと申しまして、ちようど今から十三年前、恐おそろしい洪水おおみずがございました、こんな高い処まで川の底になりましたね、麓ふもとの村も山も家も残らず流れてしまいました。この上かみの洞ほらも、はじめは二十軒ばかりあつたのでござんす、この流れもその時から出来ました、ご覧なさいましな、この通り皆な石が流れたのでございますよ。）

おんな  
婦人はいつかもう米を精しらげ果はてて、衣紋えもんの乱れた、乳はしの端も  
ほの見ゆる、膨ふくらかな胸を反そらして立つた、鼻高く口を結んで目  
うっとり  
を恍惚と上を向いて頂を仰いだが、月はなお半腹のその累々るいりた  
巖いわおを照すばかり。

（今でもこうやって見ますと恐こわいようでごさいます。）と屈んで  
二の腕うでの処を洗っている。

（あれ、貴僧あなた、そんな行儀ぎようぎのいいことをしていらしつてはお召めし  
が濡ぬれます、気味が悪うございますよ、すっぱり裸体はだかになつて  
お洗いなさいまし、私が流して上げましょう。）

（いえ、）

（いえじゃあござんせぬ、それ、それ、お法衣ころもの袖そでが浸ひたるでは  
ありませんか、）といういきなりうしろと突然背後から帯に手をかけて、身悶みもだえを  
して縮むのを、邪慳じゃけんらしくすっぱり脱ぬいで取つた。

私は師匠が厳しかつたし、経を読む身体じや、肌さえ脱いだことはついぞ覚えぬ。しかも婦人の前、蝸牛が城を明け渡したようで、口を利くさえ、まして手足のあがきも出来ず、背中を円くして、膝を合せて、縮かまると、婦人は脱がした法衣を傍らの枝へふわりとかけた。

（お召はこうやっておきましよう、さあお背を、あれさ、じつとして。お嬢様とおっしゃって下さいましたお札に、叔母さんが世話を焼くのでござんす、お人の悪い。）といつて片袖を前歯で引上げ、玉のような二の腕をあからさまに背中に乗せたが、じつと見て、

（まあ、）

（どうかいたしておりますか。）

（痣のようになって、一面に。）

（ええ、それでございます、酷い目に逢いました。）  
思い出してもぞツとするて。」

十五

「婦人は驚いた顔をして、

（それでは森の中で、大変でございますこと。旅をする人が、  
飛驒ひだの山では蛭むしが降るといふのはあすこでござんす。貴僧あなたは抜  
道みちをご存じないから正面まともに蛭の巣をお通りなさいましたのでご  
ざいますよ。お生命いのちも冥加みよがなくらい、馬でも牛でも吸い殺すの  
でございますもの。しかし疼うずくようにお痒かゆいのでござんしょう  
ね。）

（ただいまではもう痛みますばかりになりました。）



(それではこんなものでこすりましては柔かいお肌が擦剥けましよう。) というと手が綿のように障つた。

それから両方の肩から、背、横腹、臀、さらさら水をかけてはさすつてくれる。

それがさ、骨に通つて冷たいかというところではなかつた。暑い時分じやが、理窟をいうところではあるまい、私の血が沸いたせいとか、婦人の温気か、手で洗つてくれる水がいい工合に身に染みる、もつとも質の佳い水は柔かじやそうな。

その心地の得もいわれなさで、眠気がさしたでもあるまいが、うとうとする様子で、疵の痛みがなくなつて気が遠くなつて、ひたと附ついていてる婦人の身体で、私は花びらの中へ包まれたような工合。

山家の者には肖合わぬ、都にも希な器量はいうに及ばぬが弱々

しそうな風采<sup>ふうさい</sup>じゃ、背中を流<sup>なが</sup>す中<sup>うち</sup>にもはッはッと内証<sup>ないしよ</sup>で呼吸<sup>いき</sup>がはずむから、もう断<sup>つ</sup>ろう断<sup>つ</sup>ろうと思<sup>おも</sup>いながら、例<sup>れい</sup>の恍惚<sup>うつつとり</sup>で、気はつきながら洗<sup>せん</sup>わした。

その上<sup>うしろ</sup>、山の気<sup>き</sup>か、女の香<sup>におい</sup>か、ほんのりと佳<sup>か</sup>い薫<sup>かおり</sup>がする、私<sup>わし</sup>は背後<sup>うしろ</sup>でつく息<sup>いき</sup>じゃろうと思<sup>おも</sup>った。」

上人<sup>しょうにん</sup>はちよつと句切<sup>くぎ</sup>つて、

「いや、お前様<sup>まへさま</sup>お手近<sup>おてぢか</sup>じゃ、その明<sup>あかり</sup>を搔<sup>か</sup>き立<sup>た</sup>つてもらいたい、暗<sup>か</sup>いと怪<sup>け</sup>しからぬ話<sup>わ</sup>じゃ、ここらから一番野面<sup>のづら</sup>で遣<sup>や</sup>つつけよう。」

枕<sup>まくら</sup>を並<sup>なら</sup>べた上人<sup>おぼろ</sup>の姿<sup>あかり</sup>も臃<sup>おぼろ</sup>げに明<sup>あかり</sup>は暗<sup>か</sup>くなつていた、早速燈心<sup>とうしん</sup>を明<sup>あ</sup>くすると、上人<sup>おぼろ</sup>は微笑<sup>ほほえ</sup>みながら続<sup>つ</sup>けたのである。

「さあ、そうやっていつの間<sup>あつたか</sup>にやら現<sup>うつ</sup>とも無<sup>な</sup>しに、こう、その不思議<sup>ふしぎ</sup>な、結構<sup>けつこう</sup>な薫<sup>か</sup>のする暖<sup>あつたか</sup>い花<sup>はな</sup>の中<sup>なか</sup>へ柔<sup>か</sup>かに包<sup>か</sup>まれて、足<sup>あし</sup>、腰<sup>こし</sup>、手<sup>て</sup>、肩<sup>かた</sup>、頸<sup>えり</sup>から次第<sup>しだい</sup>に天窓<sup>あたま</sup>まで一面<sup>いっぺん</sup>に被<sup>か</sup>つたから吃驚<sup>びっくり</sup>、石

に尻餅しりもちを搗ついて、足を水の中に投げ出したから落ちたと思うとたんに、女の手が背後うしろから肩越しに胸をおさえたのでしつかりつかまつた。

（貴僧あなた、お傍そばに居あせて汗臭あせくそうはござんせぬかい、とんだ暑がりな  
んでございますから、こうやっておりましてもこんなでござい  
ますよ。）という胸にある手を取つたのを、慌あわてて放して棒のよ  
うに立たつた。

（失礼）

（いいえ誰も見ておりはしませんよ。）と澄すまして言う、婦人おんなもい  
つの間にか衣服きものを脱いで全身を練絹ねりぎぬのように露あらわしていたのじゃ。  
何と驚おどろくまいことか。

（こんなに太はつておりますから、もうお愧はずかしいほど暑いのでござ  
います、今時は毎日二度も三度も来てはこうやって汗を流しま

す、この水がございませんかつたらどういたしましょう、あなた貴僧、  
お手拭てぬぐい。）」といつて絞しぼつたのを寄越よこした。

（それでおみ足をお拭ふきなさいまし。）

いつの間にか、体はちゃんと拭いてあつた、お話し申おそれすも恐  
多いが、はははははははは。」

## 十六

「なるほど見たところ、衣服きものを着た時の姿とは違ちがうて肉ししつきの  
豊かな、ふつくりとした膚はだえ。」

（さつき小屋へ入つて世話をしましたので、ぬらぬらした馬の  
鼻息が体中にかかつて気味が悪うござんす。ちようどようござ  
いますから私も体を拭きましよう。）

と姉弟が内端話うちわばなしをするような調子。手をあげて黒髪をおさえながら腋わきの下を手拭でぐいと拭き、あとを両手で絞りながら立つた姿、ただこれ雪のようなのをかかる霊水で清めた、こういう女の汗は薄紅うすくれないになつて流れよう。

ちよいちよいと櫛くしを入れて、

（まあ、女がこんなお転婆てんぱをいたしましたして、川へ落おっこちたらどうしましよう、川下かわしもへ流れて出ましたら、村里の者が何といつて見ましようね。）

（白桃しろももの花だと思ひます。）とふと心付いて何の気もなしにいうと、顔が合うた。

すると、さも嬉うれしそうに莞爾にっこりしてその時だけは初々ういういしゆう年とし紀も七ツ八ツ若やぐばかり、処女きむすめの羞はじを含ふくんで下を向いた。

私わしはそのまま目を外そらしたが、その一段の婦人おんなの姿が月を浴

びて、薄い煙に包まれながら向う岸の※に濡れて黒い、滑かな  
大きな石へ蒼味あおみを帯びて透通すきとおつて映るように見えた。

するとね、夜目で判然はつきりとは目に入らなんだが地体じたい何でも洞穴ほらあな  
があるとも見える。ひらひらと、こちらからもひらひらと、もの  
の鳥ほどはあろうという大蝙蝠おおこうもりが目を遮ささえつた。

(あれ、いけないよ、お客様があるじゃないかね。)  
不意を打たれたように叫んで身悶みもだえをしたのは婦人おんな。

(どうかなきいましたか、)もうちゃんと法衣ころもを着たから氣丈夫きじょうぶ  
に尋たずねる。

(いいえ、)

といったばかりできまりが悪そうに、くるりと後向うしろむきになった。

その時小犬ほどな鼠色ねずみいろの小坊主こぼうずが、ちよこちよことやって来て、あなやと思うと、崖がけから横に宙をひよいと、背後うしろから婦人おんなの背中へびつたり。

裸体はだかの立姿は腰から消えたようになって、抱だきついたものがある。

(畜生ちくしやう、お客様が見えないかい。)

と声こゑに怒いかりを帯びたが、

(お前達は生意気なまいきだよ、)と激あたましくいいさま、腋ふりかえの下から覗のぞこうとした件くだんの動物の天窗あたまを振返ふりかえりさまにくらわしたで。

キツキツというて奇声を放つた、件の小坊主はそのまま後飛うしろとびにまた宙を飛んで、今まで法衣ころもをかけておいた、枝えだの尖さきへ長い手てで釣つるし下さつたと思うと、くるりと釣つる瓶びん覆えしに上へ乗つて、それなりさらさらと木登きのぼりをしたのは、何と猿さるじやあるまいか。

枝から枝を伝うと見えて、見上げるように高い木の、やがて梢こずえまで、かさかさがさり。

まばらに葉の中を透すかして月は山の端はを放れた、その梢のあたり。

婦人おんなはものに拗すねたよう、今の悪戯いたずら、いや、毎々、蟄ひきと蝙蝠こうもりと、お猿で三度じゃ。

その悪戯いたに多く機嫌きげんを損そこねた形、あまり子供がはしやぎ過ぎると、若い母様おふくろには得えてある図じゃ。

本当に怒り出す。

といった風情ふぜいで面倒臭めんどうくさそうに衣服きものを着ていたから、私わしは何にも問わずに小さくなつて黙ひかつて控ひかえた。」



「優しいなかに強みのある、気軽に見えてもどこにか落着のあ  
る、馴々なれなれしくて犯し易やすからぬ品のいい、いかなることにもいざ  
となれば驚くに足らぬという身に応こたえのあるといったような風の  
婦人おんな、かく嬌瞋きょうしんを発してはきつといいことはあるまい、今この  
婦人おんなに邪慳じやくけんにされては木から落ちた猿同然じゃと、おっかなびつ  
くりで、おずおず控えていたが、いや案ずるより産うむが安い。

（貴僧あなた、さぞおかしかったでござんしょうね、）と自分でも思い  
出したように快く微笑ほほえみながら、

（しようがないのでございますよ。）

以前と変らず心安くなつた、帯も早やしめたので、

（それでは家うちへ帰りましょう。）と米磨桶こめとぎおけを小腋こわきにして、草履ぞうりを  
引ひかけてつと崖がけへ上のぼつた。

(お危あぶうござんすから。)

(いえ、もうだいぶ勝手が分つております。)

ずツと心得こころえた意つもりじゃつたが、さて上あがる時見ると思おもいの外ほか上かま  
では大層高い。

やがてまた例の木丸太を渡るのじゃが、さつきもいつた通  
り草のなかに横倒れになつてゐる木地がこうちようど鱗うろこのよう  
で、譬たとへにもよくいうが松の木は蝮うわばみに似てゐるで。

殊ことに崖を、上の方へ、いい塩梅あんばいに蜿うねつた様子が、とんだもの  
に持つて来いなり、およそこのくらしいな胸中どうなかの長虫がと思おもうと、  
頭と尾を草に隠して、月あかりに歴然ありありとそれ。

山路の時を思おもい出すと我ながら足あしが竦すくむ。

婦人おんなは深切うしろに後きづこを氣遣きづこうては氣を付けてくれる。

(それをお渡りなさいます時、下を見てはなりません。ちよう

どちゆうとでよッほど谷が深いのでございますから、目が廻まうと悪うござんす。）

（はい。）

愚ぐ図ず愚ぐ図ずしてはいられぬから、我身わがみを笑いつけて、まず乗つた。引ひかかるよう、刻きざが入れてあるのじゃから、気きさえ確たしかなら足駄あしだでも歩行あるかれる。

それがさ、一件たじやから耐たらぬて、乗るとこうぐらぐらして柔かにずるずると這はいそうじやから、わつというひんまたと引跨ひんまたいで腰をどさり。

（ああ、意気地いはくじじはございませぬえ。足駄では無理でございましょう、これとお穿はき換かえなさいまし、あれさ、ちゃんということきを肯きくんですよ。）

私わしはそのさつきから何なんとなくこの婦人おんなに畏敬いけいの念が生じて

善か悪か、どの道命令されるように心得たから、いわゆるままに草履を穿いた。

するとお聞きなさい、婦人は足駄を穿きながら手を取つてくれます。

たちまち身が軽くなつたように覚えて、訳なく後に従つて、ひよいとあの孤家の背戸の端へ出た。

出会頭に声を懸けたものがある。

（やあ、大分手間が取れると思つたに、ご坊様旧の体で帰らつしやつたの。）

（何をいうんだね、小父様家の番はどうおしだ。）

（もういい時分じゃ、また私も余り遅うなつては道が困るで、そろそろ青を引出して支度しておこうと思つてよ。）

（それはお待遠でござんした。）

（何さ、行つてみさつしやいご亭主は無事じや、いやなかなか私わしが手には口説くどき落されなんだ、ははははは。）と意味もないことを大笑おおわらいして、親仁おやじは既うまやの方へてくてくと行つた。  
白痴ばかはおなじ処ばかになお形かたちを存ぞんしている、海月くらげも日ひにあたらねば解とけぬとみえる。」

## 十八

「ヒイイン！ しつ、どうどうどうと背戸まわを廻まわる鱗爪ひづめの音ねが縁えんへ響ひびいて親仁おやじは一頭ひとの馬うまを門前かどまへへ引き出した。

轡頭くつわづらを取とつて立ちたちはだかり、

（嬢様ぢやうさまそんならこのままで私わし参まゐりやす、はい、ご坊様ぼうさまにたくさんさんご馳走ちそうして上げなされ。）

おんなは炉縁ろぶちに行燈あんどうを引附ひきつけ、俯向うつむいて鍋なべの下いぶを燻いぶしていたが、  
振仰ふりあおぎ、鉄てつの火箸ひばしを持もつた手てを膝ひざに置おいて、

(ご苦労でござんす。)

(いんえご懇ねんごろには及びましねえ。しっ!)と荒繩あらなわの綱つなを引く。

青あしげで蘆毛はだかうま、裸馬たくまで逞たてがみしいが、鬣おすの薄おすい牡おすじゃわい。

その馬うまがさ、私も別べつに馬うまは珍めづしゆうもないが、白痴殿ばかどのの背後うしろ  
に畏かしこまつて手持てもちぶさた不沙汰ふさたじゃから今引ひいて行いこうとする時縁側ときわへひ  
らりと出でて、

(その馬うまはどこへ。)

(おお、諏訪すわの湖うみの辺あたりまで馬市うまへ出でしやすのじゃ、これから明朝あした  
お坊様おぼくが歩行あるかつしやる山路さんじゆを越こえて行きやす。)

(もし、それへ乗のつて今いまからお遁にげ遊あそばすお意つもりではないかい。)  
婦人おんなは慌あわだしく遮あつて声こゑを懸かけた。

(いえ、もつたいない、修行の身が馬で足休めをしましようなぞとは存じませぬ。)

(何でも人間を乗つけられそうな馬じゃあござらぬ。お坊様は命拾いをなされたのじゃで、大人しゅうして嬢様の袖の中で、今夜は助けて貰わつしやい。さようならちよつくら行つて参りますよ。)

(あい。)

(畜生。)<sup>ちくしやう</sup> といったが馬は出ないわ。びくびくと蠢いて見える大鼻面<sup>はなツつら</sup>をこちらへ捻じ向けてしきりに私等<sup>わしら</sup>が居る方を見る様子。

(どうどうどう、畜生これあだけた獣<sup>けもの</sup>じゃ、やい！)

右左にして綱を引張つたが、脚<sup>あし</sup>から根をつけたごとくにぬつくと立っていてびくともせぬ。

親仁<sup>おやじ</sup>大いに苛<sup>いらだ</sup>立って、叩<sup>たた</sup>いたり、打<sup>ぶ</sup>つたり、馬の胴体につい

て二三度ぐるぐると廻つたが少しも歩かぬ。肩でぶツつかるよ  
うにして横腹へ体をあてた時、ようよう前足を上げたばかりま  
た四脚を突張り抜く。

（嬢様嬢様。）

と親仁が喚くと、婦人はちよつと立つて白い爪さきをちよろ  
ちよろと真黒に煤けた太い柱を楯に取つて、馬の目の届かぬほ  
どに小隠れた。

その内腰に挟んだ、煮染めたような、なえなえの手拭を抜い  
て克明に刻んだ額の皺の汗を拭いて、親仁はこれでよしという  
気組、再び前へ廻つたが、旧によつて貧乏動もしないので、綱  
に両手をかけて足を揃えて反返るようにして、うむと総身に力  
を入れた。とたんにごうじやい。

凄じく嘶いて前足を両方中空へ翻したから、小さな親仁は仰



向むかひに引ひくりかえつた、ずどんどう、月夜に砂煙すなけむりがぱつと立つ。  
 白痴ばかにもこれは可笑おかしかったろう、この時ばかりじゃ、真直まっすぐ  
 に首くびを据すえて厚くちびるい唇くちびるをばくりと開けた、大粒おおつぶな歯むきだを露出むきだして、  
 あの宙そらへ下くだげている手を風かぜで煽あおるように、はらりはらり。

(世話せわが焼やけることねえ、)

婦人おんなは投なげるようにいつて草履ぞうりを突つかけて土間つへついと出る。

(嬢かんちが様さま勘違かんちがいさつしやるな、これはお前まへ様さまではないぞ、何でも  
 はじめからそこな坊ぼく様さまに目めをつけたつけよ、畜生ぞくえん俗縁ぞくえんがある  
 だッだぺいぺいわわき。)

俗縁ぞくえんは驚おどろきたい。

すると婦人おんなが、

(貴僧あなたここへいらつしやる路みちで誰たれにかお逢あいななきりはしません  
 か。)

「はい、辻の手前で富山の反魂丹売に逢いましたが、一足先にやっぱりこの路へ入りました。」

（ああ、そう。）と会心の笑を洩して婦人は蘆毛の方を見た、およそ耐らなく可笑しいといったはしたない風采で。

極めて与し易う見えたので、

（もしや此家へ参りませなんだでございませうか。）

（いいえ、存じません。）という時たちまち犯すべからざる者になつたから、私は口をつぐむと、婦人は、匙を投げて衣の塵を払うている馬の前足の下に小さな親仁を見向いて、

（しようがないねえ、）といいながら、かなぐるようにして、そ

の細帯を解きかけた、片端かたはしが土へ引こうとするのを、搔取かいとつてちよいと猶予ためらう。

（ああ、ああ。）と濁にごった声を出して白痴ばかが件くだんのひよろりとした手を差向さしむけたので、婦人おんなは解いたのを渡してやると、風呂敷ふろしきを寛ひろげたような、他愛たわいのない、力のない、膝ひざの上へわがねて宝物ほうもつを守護まもるようじや。

婦人おんなは衣紋えもんを抱かかり合せ、乳の下でおさえながら静しずかに土間を出て馬うまの傍わきへつつと寄よつた。

私わしはただ呆氣あつけに取られて見てみると、爪立つまだちをして伸び上り、手をしなやかに空あぎまにして、二三度鬣たてがみを撫なでたが。

大きな鼻頭はなづらの正面にすつくりと立たった。丈せいもすらすらと急に高たかくなつたように見えた、婦人おんなは目を据すえ、口を結び、眉まゆを開あいて恍惚うつとりとなつた有様ありさま、愛嬌あいきようも嬌態しなも、世話うちとらしい打解うちとけた風

はとみに失せて、神か、魔かと思われる。

その時裏の山、向うの峰、左右前後にすくすくとあるのが、一ツツ嘴くちばしを向け、頭かしらを擡もたげて、この一落いちらくの別天地、親仁おやじを下手しもてに控え、馬に面あたしてイんだ月下の美女の姿を差覗さしのぞくがごとく、陰々いんいんとして深山みやまの気が籠こもつて来た。

生ぬるい風なまのような氣勢けはいがすると思うと、左の肩かたはだから片膚かたはだを脱はずいだが、右の手みぎを脱はずして、前へ廻し、ふくらんだ胸のあたりで着きていたその単衣ひとえを円まるげて持ち、霞かすみも絡まとわぬ姿すがたになった。

馬は背せな、腹はらの皮かわを弛ゆるめて汗あせもしとどに流れんばかり、突張つっばつた脚あしもなよなよとして身震みぶるいをしたが、鼻面はなづらを地ちにつけて一掴ひとつかみの白泡しろあわを吹出ふきだしたと思うと前足を折ろうとする。

その時、頤あごの下へ手をかけて、片手で持っていた単衣をふわりと投なげて馬の目を蔽おほうが否いなや、兎うさぎは躍おどつて、仰あおむ向けざまに身

を翻し、妖氣を籠めて朦朧とした月あかりに、前足の間に膚が挟ったと思うと、衣を脱して搔取りながら下腹をつと潜つて横に抜けて出た。

親仁は差心得たものと見える、この機かけに手綱を引いたから、馬はすたすたと健脚を山路に上げた、しゃん、しゃん、しゃん、しゃん、しゃん、しゃん、——見る間に眼界を遠ざかる。

婦人は早や衣服を引かけて縁側へ入つて来て、突然帯を取ろうとすると、白痴は惜しそうに押えて放さず、手を上げて、婦人の胸を圧えようとした。

邪慳に払い退けて、きつと睨んで見せると、そのままがつくりと頭を垂れた、すべての光景は行燈の火も幽に幻のように見えたが、炬にくべた柴がひらひらと炎先を立てたので、婦人は

つと走つて入る。空の月のうらを行くと思うあたり遙はるかに馬子歌まごうたが聞えたて。」

二十

「さて、それからご飯の時じゃ、膳ぜんには山家やまがの香かうの物、生姜はじかみの漬つけたのと、わかめを茹うでたの、塩漬しおの名も知らぬ蕈きのこの味噌汁みそしる、いやなかなか人参にんじんと干瓢かんびょうどころではござらぬ。

品物は侘わびしいが、なかなかのお手料理、餓うえてはいるし、冥加みょうが至極しごくなお給仕きよし、盆を膝ひざに構かまえてその上に肱ひじをついて、頬ほおを支たえながら、嬉うれしそうに見ていたわ。

縁側えんがわに居いた白痴ばかは誰たれも取合とりあぬ徒然つれづれに堪たえられなくなつたものか、ぐたぐたと膝行いざりだ出して、婦人おんなの傍そばへその便べん々べんたる腹はらを持つ

て来たが、崩れたように胡坐して、しきりにこう我が膳を視めて、指をした。

(うううう、うううう。)

(何でございますね、あとでお食んなさい、お客様じゃありませんか。)

白痴は情ない顔をして口を曲めながら頭を掉つた。

(厭？ しょうがありませんね、それじゃご一所に召しあがれ。

貴僧、ご免を蒙りますよ。)

私は思わず箸を置いて、

(さあどうぞお構いなく、とんだご雑作を頂きます。)

(いえ、何の貴僧。お前さん後ほどに私と一所にお食べなさればいいのに。困った人でございますよ。)とそらさぬ愛想、手早くおなじような膳を拵えてならべて出した。

飯のつけようも効々しい女房ぶり、しかも何となく奥床しい、  
上品な、高家の風がある。

白痴はどんよりした目をあげて膳の上を睨めていたが、

（あれを、ああ、ああ、あれ。）といつてきよろきよると四辺を  
胸す。

婦人はじつと瞻つて、

（まあ、いいじゃないか。そんなものはいつでも食られます、今夜はお客様がありますよ。）

（うむ、いや、いや。）と肩腹を揺つたが、ベそを搔いて泣出し  
そう。

婦人は困じ果てたらしい、傍のものの気の毒さ。

（嬢様、何か存じませんが、おつしやる通りになすつたがよい  
ではござりませんか。私にお氣遣はかえつて心苦しゅうござり



ます。と慇懃いんぎんにいうた。

婦人おんなはまたもう一度、

(厭いやかい、これでは悪いのかい。)

白痴ばかが泣出しそうになると、さも怨うらめしげに流眊ながしめに見ながら、

これれごわれになつた戸棚とだなの中から、鉢はちに入つたのを取り出して手早く白痴ばかの膳ぜんにつけた。

(はい。)と故わざとらしく、すねたようにいつて笑顔えがおづくり造つくり。

はてさて迷惑めいわくな、こりや目の前まへで黄色蛇あおだいしやうの旨煮うまにか、腹籠はらごもりの猿

の蒸焼むしやきか、災難あかがえるが軽ひものうても、赤蛙あかがえるの干物ひものを大口あかにしやぶるであ

ろうと、そつと見ていると、片手に腕わんを持ちながら拵つかみだ出したの

は老沢庵ひねたくあん。

それもさ、刻にぎりぶとんだのではないで、一本三ツ切よこぐわにしたろうとい

う握にぎりぶと太よこぐわなのを横銜よこぐわえにしてやらかすのじや。

婦人おんなはよくよくあしらいかねたか、盗むぬすように私わしを見てきつと顔を赭あからめて初心ひんぎらしい、そんな質たちではあるまいに、羞はずかしげに膝ひざなる手拭てぬぐいの端はしを口にあてた。

なるほどこの少年はこれであろう、身体からだは沢庵色さわあにいろにふとつてい  
る。やがてわけもなく餌食えじきを平たいらげて湯ともいわず、ふツふツ  
と大儀たいぎそうに呼吸いきを向うへ吐つくわさ。

（何でございますか、私は胸むねに支つかえましたようで、ちつとも欲  
しくございませんから、また後のちほどに頂きましよう、）  
と婦人おんな自分は箸も取らずに二ツの膳を片づけてな。」

## 二十一

「しばらくしよんぼりしていたつけ。

（貴僧、さぞお疲労、すぐにお休ませ申しませうか。）

（難有う存じます、まだちつとも眠くはござりません、さつき体を洗いましたので草臥もすつかり復りました。）

（あの流れはどんな病にでもよく利きます、私が苦勞をいたしまして骨と皮ばかりに体が朽れましても、半日あすこにつかつておりますと、水々しくなるのでございますよ。もつともあのこれから冬になりまして山がまるで氷つてしまい、川も岨も残らず雪になりましたも、貴僧が行水を遊ばしたあすこばかりは水が隠れません、そうしていきりが立ちます。

鉄砲疵のございます猿だの、貴僧、足を折つた五位鷲、種々なものが浴みに参りますからその足跡で岨の路が出来ますくらい、きつとそれが利いたのでございましょう。

そんなにございませなければこうやってお話をなすつて下さ

いまし、寂しくつてなりません、本当にお愧しゆうございますが、こんな山の中に引籠つておりますと、ものをいうことも忘れましたようで、心細いのでございますよ。

貴僧、それでもお眠ければご遠慮なさいますなえ。別にお寢室と申してもございませませんがその代り蚊は一ツも居ませんよ、町方ではね、上の洞の者は、里へ泊りに来た時蚊帳を釣つて寝かそうとすると、どうして入るのか解らないので、梯子を貸せいと喚いたと申して駈るのでございます。

たと朝寐を遊ばしても鐘は聞えず、鶏も鳴きません、犬だつておりませんからお心安うござんしよう。

この人も生れ落ちるとこの山で育つたので、何にも存じません代り、気のいい人でちつともお心置はないのでござんす。

それでも風俗のかわつた方がいらつしやいますと、大事にし

てお辞儀しぎをすることだけは知つてでございしますが、まだご挨拶あいさつをいたしませんね。この頃は体がだるいと見えてお惰なまけさんになんなすつたよ。いいえ、まるで愚おろかなものでございませぬ、何でもちゃんと心得こころえております。

さあ、ご坊様にご挨拶をなすつて下さい。まあ、お辞儀をお忘れかい。)と親おやしげに身を寄せて、顔を差のぞし覗のぞいて、いそいそしていうと、白痴ばかはふらふらと両手をついて、ぜんまいが切れたようにがっくり一礼。

(はい)と行って私も何か胸むねが迫せまつて頭かぶを下くだげた。

そのままその俯うつむ向むいた拍子ひょうしに筋すぢが抜ぬけたらしい、横よこに流れようとするのを、婦人おんなは優やさしゆう扶たすけ起たして、

(おお、よくしたねえ。)

あつぱれ  
天晴あつぱれといいたそうな顔色かおつきで、

（貴僧、申せば何でも出来ましようと思ひますけれども、この人の病ばかりはお医者の手でもあの水でも復りませなんだ、両足が立ちませんのでございますから、何を覚えさしましても役には立ちません。それにご覧なさいまし、お辞儀一ツいたしましすさえ、あの通り大儀らしい。

ものを教えますと覚えますのにさぞ骨が折れて切のうござんしよう、体を苦しませるだけだと存じて何にもさせないで置きますから、だんだん、手を動かす働も、ものをいうことも忘れしました。それでもあの、謡が唄えますわ。二ツ三ツ今でも知っておりますよ。さあお客様に一ツお聞かせなさいましなね。」

白痴は婦人を見て、また私が顔をじろじろ見て、人見知をするといった形で首を振った。」

「左右して、婦人が、励ますように、賺すようにして勧めると、白痴は首を曲げてかの臍を弄びながら唄った。

木曾の御嶽山は夏でも寒い、

拾遣りたや足袋添えて。

(よく知っております、)と婦人は聞き澄して莞爾する。

不思議や、唄った時の白痴の声はこの話をお聞きなさるお前

様はもとよりじやが、私も推量したとは月鼈雲泥、天地の相違、

節廻し、あげさげ、呼吸の続くところから、第一その清らかな

涼しい声という者は、到底この少年の咽喉から出たものではな

い。まず前の世のこの白痴の身が、冥土から管でそのふくれた

腹へ通わして寄越すほどに聞えましたよ。

私は畏かしこまつて聞き果ふたりてると、膝ひざに手をついたツきりどうしても顔を上げてそこな男女ふたりを見ることが出来ぬ、何か胸がキヤキヤして、はらはらと落涙らくるいした。

おんな  
婦人は目早く見つけたそうで、

（おや、貴僧あなた、どうかなきいましたか。）

急いそにもものもいわれなんだが漸々ようよう、

（はい、なあに、変かつたことでもござりませぬ、私わしも嬢様ぢやうさまのことは別べつにお尋たずね申しませんから、貴女あなたも何にも問とうては下さりませぬ。）

と仔細しさいは語かたらずただ思い入いつてそう言うたが、実は以前いぜんから様子ようすでも知しれる、金釵きんさき玉簪ぎよくさんをかざし、蝶衣ちやういを纏まとうて、珠履しゆりを穿うがたば、正まさに驪山りさんに入いつて、相抱あいいだくべき豊肥ほうひ妖艶ようえんの人が、その男おとこに対する取廻とくまわしの優やさしさ、隔へだてなき、深切しんせつさに、人事ひとごとながら嬉うれし



くて、思わず涙が流れたのじゃ。

すると人の腹の中を読みかねるような婦人おんなではない、たちまち様子を悟さとったかして、

（貴僧あなたはほんとうにお優しい。）といつて、得えも謂いわれぬ色を目めに湛たたえて、じつと見た。私わしも首こうべを低たれた、むこうでも差俯さしうつむ向むく。いや、行燈あんどうがまた薄暗はくあんくなつて参まゐつたようじゃが、恐おそらくこりや白痴ばかのせいじゃやて。

その時よ。

座が白けて、しばらく言葉が途絶とだえたうちに所在ところがないので、唄うたうたいの太夫たゆう、退屈たいくつをしたとみえて、顔かほの前の行燈あんどうを吸すい込こむような大欠伸おおあくびをしたから。

身動きみうごきをしてな、

（寝ねようちやあ、寝ねようちやあ、）とよたよた体もちあつかを持扱もちあつかうわい。

(眠うなつたのかい、もうお寝か。)  
 といったが坐り直つてふと気がついたように四辺を朣した。戸外はあたかも真昼のよう、月の光は開け拵げた家の内へはらはらとさして、紫陽花の色も鮮麗に蒼かつた。

(貴僧ももうお休みなさいですか。)

(はい、ご厄介にあいなります。)

(まあ、いま宿を寝かします、おゆつくりなさいましな。戸外

へは近うござんすが、夏は広い方が結句宜うございませう、

私どもは納戸へ臥せりますから、貴僧はここへお広くお寛ぎが

ようござんす、ちよいと待つて。)といいかけてツと立ち、つ

かつかと足早に土間へ下りた、余り身のこなしが活漕であつた

ので、その拍子に黒髪が先を巻いたまま項へ崩れた。

鬢をおさえて戸につかまつて、戸外を透したが、独言をした。

(おやおやさつきさの騒さわぎで櫛くしを落おしたそうな。)  
いかさま馬うまの腹はらを潜くぐつた時ときじゃ。」

二十三

この折せきから下の廊下ろうかに跫音あしおとがして、静しずかに大跨おおまたに歩行あいたのが、  
寂せきとしていているからよく。

やがて小用こようを達たした様子ようす、雨戸あまどをばたりと開あけるのが聞きえた、  
手水鉢ちすずばちへ柄杓ひしやくの響ひびき。

「おお、積つもつた、積つもつた。」と呟つぶやいたのは、旅籠屋はたごやの亭主ていしゅの声こゑで  
ある。

「ほほう、この若狭わかさの商人あきんどはどこかへ泊とつたと見みえる、何か愉快おもしろ  
い夢ゆめでも見みているかな。」

「どうぞその後を、それから。」と聞く身には他事をいううちが  
もどか  
牴牾しく、にべ膠もなく続きを促した。うなが

「さて、夜も更ふけました、」といつて旅僧たびそうはまた語出かたりだした。

「たいてい推量みりもなさるであろうが、いかに草臥くたびれておつても  
申上げたような深山みやまの孤家ひとつやで、眠られるものではない、それに  
少し気になつて、はじめの内私わしを寝かさなかつた事もあるし、  
目は冴さえて、まじまじしていたが、さすがに、疲つかれが酷ひどいから、心  
は少しぼんやりして来た、何しろ夜の白むのが待遠まちどおでならぬ。

そこではじめの内は我ともなく鐘の音の聞えるのを心頼みに  
して、今鳴るか、もう鳴るか、はて時刻はたつぷり経たつたもの  
をと、怪あやしんだが、やがて気が付いて、こういう処ところじゃ山寺ど  
ころではないと思うと、にわかたかに心細くなつた。

その時は早や、夜がものに譬たとえると谷の底そこじゃ、白痴ばかがだら

しのない寐息ねいきも聞えなくなると、たちまち戸の外にもものけはいの氣勢けはいがしてきた。

けもの獣の蹠音けもののようで、さまで遠くの方から歩行あるいて来たのではないよう、猿も、蟄ひきも、居る処と、気休めにまず考えたが、なかなかどうして。

しばらくすると今そやつが正面の戸ちかづに近ちかづいたなと思つたのが、羊の鳴声になる。

私はその方を枕まくらにしていたのじやから、つまり枕頭まくらもとの戸外おもてじやな。しばらくすると、右手めでのかの紫陽花が咲めいていたその花の下あたりで、鳥の羽ばたきする音。

むささびか知らぬがきツキツツといって屋むねの棟むねへ、やがておよそ小山ほどあろうと気取けどられるのが胸おを圧おすほどに近ちかづいて来て、牛が鳴いた、遠くかなたの彼方かなたからひたひたと小刻こぎのみに駈かけて来るのは、

二本足に草鞋わらじを穿はいた獣と思われた、いやさまさまにむらむらと家うちのぐるりを取巻いたようで、二十三十のものの鼻息、羽音、中には囁ささやいているのがある。あたかも何よ、それ畜生道ちくしようどうの地獄の絵を、月夜に映したような怪しの姿が板戸一枚、魍魎ちみも魍魎うりようと、いうのであろうか、ざわざわと木の葉が戦そよぐ気色けしきだった。

息を凝こらすと、納戸で、

(うむ) といつて長く呼吸いきを引いて一声、魘ひとこえれたのは婦人おんなじゃ。

(今夜はお客様があるよ。) と叫んだ。

(お客様があるじゃないか。)

としばらく経つて二度目のははつきりと清すずしい声。

極めて低声こしえで、

(お客様があるよ。) といつて寝返る音がした、更さらに寝返る音がした。

戸の外のものの氣勢けはいは動揺どよめきを造るがごとく、ぐらぐらと家が揺ゆらめいた。

私は陀羅尼だらにを呪じゆした。

若不順我呪にやくふじゆんがしゆ 恼乱のうらん説法せつぽう者じゃ

頭破ずはさしちふん作し七分ふん 如阿梨樹枝にょありじゆし

如殺父母罪によしふもざい 亦如厭油殃やくにょおゆうおう

斗秤欺誑人としようごおうにん 調達破僧罪じようだつはそうざい

犯此法師者ほんしほつししや 当獲如是殃とうぎやくによぜおう

と一心不亂、さつと木の葉を捲まいて風が南みなみへ吹いたが、たち

まちしずま静り返った、夫婦が閨ねやもひッそりした。」

「翌日ひるじろまた正午頃、里近く、滝のある処で、昨日馬きのううを売りに行つた親仁おやしの帰りに逢おうた。

ちようど私わしが修行しゆぎやうに出るのを止よして孤家ひとりつやに引返して、婦人おんなと一所いっしょに生涯しやうがいのを送ろうと思つていたところで。

実を申すとここへ来る途中でもその事ばかり考える、蛇の橋さいわいも幸さいわいになし、蛭ひるの林もなかつたが、道みちが難渋なんじゆうなにつけても、汗あせが流れて心持こころもちが悪いにつけても、今更いまさら行脚あんぎやもつまらない。紫むらさきの袈裟けさをかけて、七堂伽藍しちどうがらんに住んだところで何ほどのこともあるまい、活仏いきぼとけさま様じゃというて、わあわあ拜うやまつまれれば人いきれで胸むねが悪くなるばかりか。

ちとお話わたりごともいかがじゃから、さつきはことを分けていいませなんだが、昨夜ゆうべも白痴ばかを寐ねかしのつけると、婦人おんながまた炉いろのある処へやつて来て、世の中へ苦勞くるわうをしに出ようより、夏は涼しく、



冬は暖い、この流ながれに一所わたしに私の傍そばにおいでなさいというてくれるし、まだまだそればかりでは自分に魔まが魅さしたようじゃけれども、ここに我身いで我身いに言い訳わけが出来るといふのは、しきりにおんなおんなが不便ふびんでならぬ、深山みやまの孤家ひとつやに白痴ばかの伽ときをして言葉も通ぜず、日ひを経ふるに従したがうてもものをいうことさえ忘れるような気がするといふは何たる事！

殊ことに今朝けさも東雲しのめに袂たもとを振り切きつて別わかれようとする、お名残惜なごりおしや、かような処ところにこうやって老朽おいくちる身の、再びお目にはかかられまい、いささ小川せうがわの水みづになりとも、どこぞで白桃しろももの花はなが流ながれるのをご覧らんになつたら、私の体たいが谷川やがわに沈しんで、ちぎれちぎれになつたことと思おもえ、といつて悄しおれながら、なお深切しんせつに、道みちはただこの谷川やがわの流ながれに沿したがうて行きさえすれば、どれほど遠とほくても里さとに出でらるる、目の下した近く水みづが躍おどつて、滝たきになつて落おつる

のを見たら、人家が近づいたと心を安んずるように、と氣をつけて、孤家ひとつやの見えなくなつた辺あたりで、指ゆびさしをしてくれた。

その手と手を取交とりかわすには及ばずとも、傍そばにつき添そつて、朝夕はなしあいての話対手きのこ、蕈ぜんの汁でご膳ぜんを食べたり、私わしが櫓ほだを焚たいて、婦人おんなが鍋なべをかけて、私わしが木この実みを拾みつて、婦人おんなが皮かわを剥むいて、それから障子しょうじの内と外で、話をしたり、笑つたり、それから谷川やがわで二人して、その時の婦人おんなが裸体はだかになつて私わしが背中せなかへ呼吸いきが通かよつて、微妙びみょうな薫かおりの花びらあたたかに暖あたたかに包かまれたら、そのまま命いのちが失せてもいい！

滝の水を見るにつけても耐たえ難がたいのはその事であつた、いや、冷汗ひやあせが流れますすて。

その上、もう氣がたるみ、筋すじが弛ゆるんで、早はや歩ある行くのに飽あきが来て、喜ばねばならぬ人家が近づいたのも、たかがよくされ

て口の臭いくさ婆さんばあに渋茶しぶちやを振舞ふるまわれるのが関せきの山と、里さとへ入るのも厭いやになつたから、石の上へ膝ひざを懸かけた、ちようど目の下にある滝たきじやつた、これがさ、後のちに聞くと女夫滝めおとたきと言うそうで。

真中まんなかにまず鰐鮫わにざめが口をあいたよな先のとがつた黒い大巖おおいわが突出つぎでしていると、上から流れて来るさつと瀬せの早い谷川やがわが、これに当あたつて両ふたつに岐わかれて、およそ四丈よんじやうばかりの滝たきになつてどつと落ちて、また暗碧あんぺきに白布しろぬのを織おつて矢やを射やるように里さとへ出るのじやが、その巖いわにせかれた方は六尺むさかばかり、これは川かの一幅ひとばを裂さいて糸いとも乱みだれず、一方は幅あが狭せまい、三尺さんせきくらい、この下したには雑多ざつたな岩いわが並ならぶとみえて、ちらちらと玉たまの簾すだれを百千ひゃくせんに砕くだいたよう、件くだんの鰐鮫わにざめの巖いわに、すれつ、縫もつれつ。」

「ただ一筋ひとすじでも巖を越して男滝おだきに縋りつこうとする形、それでも中を隔へだてられて末までは雫しずくも通わぬので、揉もまれ、揺られてつぶ具つさに辛苦しんくを嘗なめるといふ風情ふぜい、この方は姿も窈やつれ容かたちも細こつて、流るる音さえ別様に、泣くか、怨うらむかとも思われるが、あわれにも優しい女滝めだきじゃ。

男滝の方はうらはらで、石を砕き、地を貫つらぬく勢いきおい、堂々たる有様ありさまじゃ、これが二くたつ件の巖に当つて左右に分れて二筋となつて落ちるのが身に浸しみて、女滝の心を砕く姿は、男の膝に取つて美女が泣いて身を震ふるわすようで、岸に居てさえ体がわななく、肉おとが跳はる。ましてこの水上みなかみは、昨日孤家の婦人おんなと水を浴びた処おんなと思うと、気のせいかなその女滝の中に絵のようなかの婦人の姿おんなが歴々ありあり、と浮いて出ると巻込まれて、沈んだと思うとまた浮い

て、千筋ちすじに乱るる水とともにその膚はだえが粉こに碎けて、花片はなびらが散込むような。あなやと思ふと更に、もとの顔も、胸も、乳も、手足まつたも全き姿となつて、浮まいつ沈みつ、ぱつと刻まれ、あつと見る間にまたあらわれる。私わしは耐たまらず真逆まつさかさまに滝の中へ飛込んで、女滝をしかと抱いたとまで思つた。気がつくとどろくと男滝の方はどうどうと地響じひびき打たせて。山彦やまびこを呼んで轟とどろいて流れている。ああその力をもつてなぜ救わぬ、儘ままよ！

滝に身を投げて死のうより、旧もとの孤家ひとつやへ引返せ。汚けがらわしい欲のあればこそこうなつた上に躊躇ちゆうちゆうするわ、その顔を見て声を聞けば、かれら夫婦が同衾ひとつねするのに枕まくらを並べて差支さしつかえぬ、それでも汗になつて修行をして、坊主で果てるよりはよほどのまじやと、思切おもいきつて戻ろうとして、石を放れて身を起した、背後うしろから一ツ背中を叩たたいて、

(やあ、ご坊様。)といわれたから、時が時なり、心も心、後暗うしろぐらいので喫驚びつくりして見ると、閻王えんおうの使つかいではない、これが親仁おやし。

馬は売びつたか、身軽こいになつて、小さな包みを肩にかけて、手に一尾うろこの鯉こんじきの、鱗はつらつは金色なる、澆刺あぎととして尾の動きそうな、鮮あたらしい、その丈たけ三尺ばかりなのを、顛わらに藁わらを通して、ぶらりと提みげていた。何んにも言わず急みまにもものもいわれないで瞻おやしると、親仁おやしはじつと顔を見たよ。そうしてにやにやと、また一通りの笑あつぎい方あつぎではないで、薄気味うすきみの悪い北叟ほくそえみ笑あつぎをして、

(何をしてござる、ご修行の身が、このくらの暑あつぎで、岸あつぎに休あつぎんでいきつしやる分ではあんめえ、一生懸命いっしょうけんめいに歩あ行るかつしやりや、昨夜ゆうべの泊とまりからここまではたつた五里、もう里へ行つて地藏あつぎ様を拝あつぎまつしやる時刻じや。

何じやの、己おらが嬢おもい様に念かが懸かつて煩悩ぼんのうが起きたのじやの。う

んにや、秘かくさつしやるな、おらが目は赤くツても、白いか黒いかはちやんと見える。

地じたいなみ体並のものならば、嬢ぢやう様の手が触さわつてあの水を振舞ふるまわれて、今まで人間でいようはずがない。

牛か馬か、猿か、蟄ひきか、蝙蝠こうもりか、何にせい飛んだか跳はねたかせねばならぬ。谷川から上つて来さした時、手足も顔も人じやから、おらあ魂たまげ消たくらい、お前まへ様それでも感心こころざしに志けんごが堅固けんごじやから助かつたよなものよ。

何と、おらが曳ひいて行つた馬を見さしたろう。それで、孤ひとつや家へ来さつしやる山路やまみちで富山とやまの反魂丹はんこんたん売うりに逢あわしたというではないか、それみさつせい、あの助平野すけべいやろう郎、とうに馬になつて、それ馬市おあしで銭あしになつて、お銭あしが、そうらこの鯉こいに化けた。大好物で晩飯の菜あしになさる、お嬢様を一体何じやと思わつしやるの。」

わたし  
私は思わず遮さかえった。

「お上人しやうにん？」

## 二十六

上人うなずは頷うなずきながら呟つぶやいて、

「いや、まず聞きかつしやい、かの孤家ひとつやの婦人おんなというは、旧もとな、これわしも私わしには何かの縁えんがあつた、あの恐おそしい魔まし処よへ入いろうといううそばみち岐道そばみちの水みづが溢あふれた往來わらいで、百姓ひやくしやうが教おしえて、あすこはその以前いぜん医者いしやの家いへであつたというたが、その家の嬢ぢやう様さまじや。

何でも飛ひ驎だ一円いちえん当たう時じ變へんつたことも珍めづらしいこともなかつたが、ただ取いり出いでていう不思議ふしぎはこの医者いしやの娘むすめで、生まうまると玉たまの



よう。

おふくろどのほおつべた母親殿は頬板めじりのふくれた、眦めじりの下つた、鼻の低い、俗にさし

乳ちちというあの毒々しい左右の胸の房を含んで、どうしてあれほど美しく育つたものだろうという。

昔から物語の本にもある、屋の棟むねへ白羽の征矢そやが立つか、さもなければ狩倉かりくらの時貴人あてびとのお目に留とまつて御殿ごてんに召出めしだされるのは、あんなのじやと噂うわさが高かつた。

てておや父親てておやの医者というのは、頬骨ほおほねのとがつた髯ひげの生えた、見得坊みえぼうで傲慢ごうまん、その癖くせでもじや、もちろん田舎いなかには刈入かりいれの時よく稲いねの穂ほが目に入ると、それから煩わづらう、脂目やにめ、赤目あかめ、流行目はやりめが多いから、先生眼病の方は少し遣やつたが、内科と来てはからツぺた。外科なんと来た日にやあ、鬢びんつけ附へ水を垂らしてひやりと疵きずにつけるくらいなところ。

鯛いわしの天窓あたまも信心から、それでも命数の尽つきぬ輩やからは本復ほんふくするか  
ら、外ほかに竹庵ちくあん養仙ようせん木齋もくさいの居いない土地、相応はんじょうに繁盛はんじょうした。

殊ことに娘むすめが十六七、女盛おんなざかりとなつて来た時分には、薬師やくし様さまが人助ひとすけけ  
に先生せんせい様の内うちへ生うまれてござつたというて、信心しんじん渴仰かつごうの善男ぜんなん善女ぜんにょ？  
病男びやうなん病女びやうにょが我も我もと詰つめ懸かける。

それというのが、はじめりはかの嬢ぢやう様が、それ、馴染なじみの病人びやうじん  
には毎日顔を合あせるところから愛想あいその一つも、あなたお手が痛いたみ  
ますか、どんなでございます、といつて手先てのひらへ柔なかな掌てのひらが障さわ  
ると第一番だいいちばんに次作じさく兄あにいという若いわかいのの（りようまちす）が全  
快ぜんかい、お苦しくるしみそうなといつて腹はらをさすつてやると水みづあたりの差込さしこみ  
の留とどまったのがある、初手しよては若い男おとこばかりに利きいたが、だんだ  
ん老人としよりにも及およぼして、後あとには婦人おんなの病人びやうじんもこれで復なほる、復なほらぬ  
までも苦痛いたみが薄うすらぐ、根太ねぶとの膿うみを切きつて出ですさえ、錆さびびた小刀こば

で引裂くひつき医者殿が腕前じや、病人は七顛八倒して悲鳴を上げるのが、娘が来て背中へぴつたりと胸をあてて肩を押えていると、我慢がまんが出来るといったようなわけであつたそうなの。

ひとしきりあの藪やぶの前にある枇杷びわの古木へ熊蜂くまんぼちが来て恐おそろしい大きな巣をかけた。

すると医者うちでしの内弟子で薬局、拭掃除ふきそうじもすれば総菜そうざい畠はたけの芋いもも掘ほる、近い所へは車夫も勤めた、下男兼帯げなんけんたいの熊蔵くまぞうという、その頃ころ二十四五歳さい、稀塩散きえんさんに単舎利別たんしやりべつを混ぜたのを瓶びんに盗んで、内うちが吝嗇けちじゃから見附かると叱しかられる、これを股引ももひきや袴はかまと一所いっしょに戸棚との上に載のせておいて、隙ひまさえあればちびりちびり飲のんでた男が、庭掃除そうじをするといつて、件くだんの蜂の巣を見つけたつけ。

縁側えんがわへやって来て、お嬢様面白くたいことをしてお目に懸かけましょう、無駄ふしつけでござりますが、私わたしのこの手を握にぎつて下さりますと、あ

の蜂の中へ突つ込んで、蜂を掴つかんで見せましよう。お手が障さわつた所だけは螫さしましても痛みませぬ、竹箒たけぼうきで引ひ払ばたいては八方へ散らばつて体中に集たかられてはそれは凌しのげませぬ即死そくしでございますかと、微笑ほほえんで控さえる手で無理に握にぎつてもらい、つかつかと行くと、凄すさまじい虫の唸うなり、やがて取とつて返かえした左の手に熊蜂が七ツ八ツ、羽はばたきをするのがある、脚あしを振あうのがある、中には掴つかんだ指の股またへ這出はいだしているのがあつた。

さあ、あの神様の手が障れば鉄砲玉でも通るまいと、蜘蛛くもの巣のように評判が八方へ。

その頃ころからいつとなく感得かんとくしたものとみえて、仔細しさいあつて、あの白痴ばかに身を任せて山に籠こもつてからは神変不思議、年としをふ経へるに従したがうて神通自在じんつうざいじゃ。はじめは体を押つけたのが、足ばかりとなり、手さきとなり、果はては間まを隔へだてていても、道みちを迷まようた旅

人は嬢様が思うままはツという呼吸で変ずるわ。

と親仁おやしがその時物語つて、ご坊は、孤家ひとつやの周囲ぐるりで、猿を見たろう、蟄ひきを見たらう、蝙蝠こうもりを見たであらう、兎うさぎも蛇も皆嬢様に谷川の水を浴びせられて畜生ちくしようにされたる輩やから！

あわれあの時あの婦人おんなが、蟄まつわに絡られたのも、猿に抱かれたのも、蝙蝠こうもりに吸われたのも、夜中に魑魅魍魎ちみもうりように魘おそわれたのも、思い出して、私わしはひしひしと胸に当たつた。

なお親仁おやしのいうよう。

今の白痴ばかも、件くだんの評判の高かつた頃、医者うちの内へ来た病人、その頃はまだ子供こども、朴訥ぼくとつな父親ちちが附添つきそい、髪かみの長い、兄貴あやうぢがおぶつて山から出て来た。脚あしに難渋なんじゆうな腫物はれものがあつた、その療治りようじを頼たのんだので。

もとより一室ひとまを借受けて、逗留とらうりゆうをしておつたが、かほどの悩なやみ

は大事<sup>おおごと</sup>じゃ、血も大分<sup>だいぶん</sup>に出さねばならぬ、殊<sup>こと</sup>に子供、手を下<sup>おろ</sup>すには体に精分をつけてからと、まず一日に三ツずつ鶏卵<sup>たまご</sup>を飲まして、気休めに膏藥<sup>こうやく</sup>を貼<sup>は</sup>っておく。

その膏藥を剥<sup>は</sup>がすにも親や兄、また傍<sup>そば</sup>のものが手を懸けると、堅<sup>かた</sup>くなつて硬<sup>こわ</sup>ばつたのが、めりめりと肉にくツついて取れる、ひいひいと泣くのじゃが、娘が手をかけてやれば黙<sup>だま</sup>つて耐<sup>こら</sup>えた。

一体は医者殿、手のつけようがなくなつて身の衰<sup>おとろえ</sup>をいい立てに一日延ばしにしたのじゃが三日経<sup>た</sup>つと、兄を残して、克明<sup>こくめい</sup>な父親<sup>てておや</sup>は股引の膝<sup>ひざ</sup>ですつて、あとさがりに玄関から土間へ、草鞋<sup>わらじ</sup>を穿<sup>は</sup>いてまた地<sup>つち</sup>に手をついて、次男坊の生命<sup>いのち</sup>の扶<sup>たす</sup>かりまするように、ねえねえ、というて山へ帰つた。

それでもなかなか抄取<sup>はかど</sup>らず、七日も経<sup>なぬか</sup>つたので、後<sup>あと</sup>に残つて附添<sup>あにじやびと</sup>つていた兄者人が、ちようど刈入で、この節は手が八本も

欲しいほど忙しい、お天気模様も雨のよう、長雨にでもなりま  
すと、山島やまぼたけにかけがえのない、稲が腐くさつては、餓死うえじにでござりま  
する、総領の私わしは、一番の働手はたらきて、こうしてはおられませぬから、  
と辞ことわりをいって、やれ泣くでねえぞ、としんみり子供にいい聞か  
せて病人を置いて行つた。

後には子供一人、その時が、戸長こちようさま様の帳面前年とし紀六ツ、親六  
十で児こが二十はたちなら徴兵ちようへいはお目こぼしと何を間違えたか届が五年  
遅うして本当は十一、それでも奥山で育つたから村の言葉も碌ろく  
には知らぬが、伶俐りこうな生れで間分まきわけがあるから、三ツずつあいか  
わらず鶏卵を吸わせられる汁つゆも、今に療治の時残らず血になつ  
て出ることと推量して、べそを搔かいても、兄者が泣くなといわ  
しつたと、耐えていた心の内。

娘ななせの情で内と一所に膳ぜんを並べて食事をさせると、沢庵たくあんの切きりを

くわえて隅すみの方へ引込ひきこむいじらしき。

いよいよ明日あすが手術という夜は、皆寐静みんなねしずまつてから、しくしく蚊かのように泣いているのを、手水ちようずに起きた娘が見つけてあまり不ふ便びんさに抱かかいて寝てやった。

さて治療りようじとなると例のごとく娘が背後うしろから抱かかっていたから、

あぶらあせ

脂汗あぶらあせを流しながら切れものが入るのを、感心にじつと耐えたのに、どこを切違えたか、それから流れ出した血が留とどまらず、見る見る内に色が変わって、危あぶなくなった。

医者も蒼あおくなつて、騒さわいだが、神の扶たすけかようよう生命いのちは取留とりとまり、三日ばかりで血も留とどつたが、とうとう腰が抜けた、もとより不具かたわ。

これが引摺ひきずつて、足を見ながら情なそうな顔をする。蟋蟀きりぎりすが拏もがれた脚あしを口くわに銜くわえて泣くのを見るよう、目もあてられたも



のではない。

しまいには泣出すと、外聞もあり、少焦すこじれで、医者おそろは恐しい顔をして睨にらみつけると、あわれがつて抱きあげる娘の胸に顔をかすがくしてすが縋すがるさまに、年来としごろずいぶん随分と人を手にかけて医者も我がを折つて腕組うでぐみをして、はツという溜息ためいき。

やがて父親てておやが迎むかえにござった、因果いんがと断念あきらめて、別に不足ふそくはいわなんだが、何分小児こどもが娘の手を放れようといわぬので、医者さいわいも幸いい、言訳いいかたがた、親兄おやあにの心をなだめるため、そこで娘こどもに小児こどもを家うちまで送らせることにした。

送つて来たのが孤家ひとつやで。

その時分はまだ一個の荘そう、家も小二十軒こあつたのが、娘が来て一日二日、ついほだされて逗留とまりゆうした五日目から大雨が降ふり出した。滝くつがえを覆おすように小歇おやみもなく家に居ながら皆簑笠みんなみのかさで凌しのいだく

らい、茅葺かやぶきの繕つくろいをすることはさて置いて、表の戸もあけられず、内うちから内うち、隣となり同士、おうおうと声をかけ合つてわずかにまだ人種ひとだねの世よに尽つきぬのを知るばかり、八日を八百年と雨の中に籠こもると九日目の真夜中から大風が吹出してその風の勢いきほここが峠とうげというところであちまち泥海どろうみ。

この洪水こうずいで生残せいざんつたのは、不思議にも娘こどもと小児こどもとそれにその時村から供をしたこの親仁おやしばかり。

おなじ水で医者の内うちも死絶しにたえた、さればかような美女が片田舎かたいなかに生れたのも国が世がわり、代だいがわりの前兆ぜんせうであろうと、土地のものと言いひ伝たえた。

嬢様ととは帰るに家なく、世にただ一人となつて小児こどもと一所いしょに山やまに留とどまつたのはご坊ぼくが見らるる通り、またあの白痴ばかにつきそつて行届ゆきとどいた世話せわも見らるる通り、洪水の時から十三年、いまに

なるまで一日もかわりはない。

といい果てて親仁はまた気味の悪い北叟笑。

(こう身の上を話したら、嬢様を不便がつて、薪を折ったり水を汲む手助けでもしてやりたいと、情が懸ろう。本来の好心、いい加減な慈悲じゃとか、情じゃとかいう名につけて、いつそ山へ帰りたかんべい、はて措かつしやい。あの白痴殿の女房になつて世の中へは目もやらぬ換にやあ、嬢様は如意自在、男はより取つて、飽けば、息をかけて獣にするわ、殊にその洪水以来、山を穿つたこの流は天道様がお授けの、男を誘う怪しの水、いのち生命を取られぬものはないのじや。

天狗道にも三熱の苦惱、髪が乱れ、色が蒼ざめ、胸が痩せて手足が細れば、谷川を浴びると旧の通り、それこそ水が垂るばかり、招けば活きた魚も来る、睨めば美しい木の実は落つる、袖

を翳せば雨も降るなり、眉を開けば風も吹くぞよ。

しかもうまれつきの色好み、殊にまた若いのが好じやで、何かご坊にいうたであろうが、それを実としたところで、やがて飽かれると尾が出来る、耳が動く、足がのびる、たちまち形が変ずるばかりじや。

いややがて、この鯉を料理して、大胡坐で飲む時の魔神の姿が見せたいな。

妄念は起さずに早うここを退かつしやい、助けられたが不思議なくらい、嬢様別してのお情じやわ、生命冥加な、お若いの、きつと修行をさつしやりませ。とまた一ツ背中を叩いた、親仁は鯉を提げたまま見向きもしないで、山路を上の方。

見送ると小さくなつて、一座の大山の背後へかくれたと思うと、油早の焼けるような空に、その山の巔から、すくすくと雲

が出た、滝の音も静まるばかり殷々として雷の響ひびき。

藻拔もぬけのように立っていた、私が魂わしたましいは身に戻った、そなたを  
拝ひとむと斉つえしく、杖つえをかい込み、小笠おがさを傾くびすけ、踵かかとを返すと慌あわただしく  
一散ひとに駈かけ下りたが、里に着いた時分に山は驟雨ゆうだち、親仁おやじが婦人おんな  
に齎もたらした鯉こいもこのために生きて孤家ひとりつやに着いたろうと思う大雨  
であった。」

高野聖こうやひじりはこのことについて、あえて別に註ちゆうして教おしえを与あたえはし  
なかつたが、翌朝たもと袂たもとを分わつて、雪中山越せつちゆうやまごえにかかるのを、名残惜なごりお  
しく見送ると、ちらちらと雪の降るなかを次第しだいに高く坂道のぼを上  
る聖の姿、あたかも雲がに駕がして行くように見えたのである。

(明治三十三年)

後註

一 ( )。「」はママ



底本：「ちくま日本文学全集 泉鏡花」筑摩書房  
1991（平成 3）年 10 月 20 日 第 1 刷  
1995（平成 7）年 8 月 15 日 第 2 刷

親本：「現代日本文学大系 5」筑摩書房

入力：真先芳秋

校正：林めぐみ

1999 年 1 月 30 日公開

2005 年 11 月 25 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作  
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。